小板井屋敷遺跡６・７

― 福岡県小郡市小板井所在遺跡の調査報告 ―

小郡市文化財調査報告書第290集

２０１５

小郡市教育委員会

序　文

この報告書は個人住宅建設に伴い、小郡市教育委員会が平成25年度に実施した小板井屋敷遺跡６および７の発掘調査の記録です。小板井屋敷遺跡は、三国丘陵から延びる洪積台地の縁辺部に営まれた弥生時代から近世にわたる集落遺跡です。今回の調査結果は、本報告書にみられるように弥生時代から古代の住居跡や、近世の屋敷地を区画していたと思われる大溝を確認することができ、当時の集落範囲や土地利用の在り方、また「屋敷」の地名を示す屋敷地の存在を示唆する好資料を得ることができました。

こうした埋蔵文化財は、地域の歴史を知るうえで欠かすことのできない文化遺産です。本書に収録したこれらの資料が、文化財に対する認識と深い理解のために、また教育、学術研究の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にあたり、調査にご理解とご協力をいただいた地元小板井区の皆様、現地作業にあたった地元作業員の皆様、ならびに発掘調査を進めるに際して多くの方々にご理解とご協力をいただいたことに厚くお礼申し上げ、序文といたします。

平成27年3月27日

小郡市教育委員会
教育長　清武　輝

例　言

1．本書は、小郡市小板井地内における個人住宅建設に伴って、平成25年度に小郡市教育委員会が実施した小板井屋敷遺跡６および７の埋蔵文化財発掘調査の記録である。
2．発掘調査に伴う整理作業は６・７ともに平成26年度に実施した。
3．遺構実測、遺構写真撮影は阿南翔悟の補助を得て６を龍孝明、７を坂井貴志が行った。遺物写真撮影は（有）システム・レコに委託した。
4．小形仿製鏡のＸ線CT撮影には、九州歴史資料館の協力を得た。
5．遺物復元は佐々木智子、衛藤知嘉子、藤岡恵子、深町幸子が行い、遺物実測は６を龍、７を白木千里、山崎頼人が行った。製図は白木が行った。
6．遺構図中の方位は座標北を示し、図上の座標は国土座標第Ⅱ系（世界測地系）に則している。
7．本書で用いた標高は、東京湾平均海水面（T.P.）を基準とした。
8．遺構・遺物実測図、遺物、写真は小郡市埋蔵文化財調査センターにて管理・保管している。
9．本書に使用している遺構略号は下記のとおりである。
SC：住居跡、SK：土坑、SD：溝、SV：周溝状遺構、SP：ピット
10．本書の執筆は第５章を山崎が、その他を龍が担当した。編集は龍が行った。

本 文 目 次

第１章　調査の経過と組織 …… 1
　１．調査の経緯と経過
　２．調査の体制

第２章　位置と環境 …… 2

第３章　小板井屋敷遺跡６・７調査の概要 …… 6

第４章　小板井屋敷遺跡６の調査 …… 6
　１．住居跡
　２．土坑
　３．溝
　４．不明遺構
　５．その他の遺構と遺物
　６．小結

第５章　小板井屋敷遺跡７の調査 …… 17
　１．住居跡
　２．周溝状遺構
　３．小結

第６章　調査の成果 …… 27
　１．溝について
　２．小板井村および屋敷地の成立について

挿 図 目 次

小板井屋敷遺跡６
第１図　周辺遺跡分布図（S=1/50,000）…… 3
第２図　小板井屋敷遺跡６・７
調査区配置図（S=1/4,000）…… 4
第３図　小板井屋敷遺跡６全体図（S=1/60）…… 5
第４図　１・２号住居跡実測図（S=1/40）…… 7
第５図　３～５号住居跡実測図（S=1/40）…… 8
第６図　２～４号住居跡出土土器実測図（S=1/4）…… 9
第７図　１・２号土坑実測図（S=1/30）…… 10
第８図　１～４号溝実測図・土層図（S=1/100、
土層図はS=1/60）…… 13
第９図　１～４号溝出土土器実測図（S=1/4）…… 14
第10図　土坑状遺構実測図（S=1/30）…… 14
第11図　包含層出土土器実測図（S=1/4）…… 15

小板井屋敷遺跡７
第12図　１号住居跡平・断面図（S=1/40）…… 17
第13図　２号住居跡・１号周溝状遺構
平・断面図（S=1/40）…… 18
第14図　調査区土層実測図（S=1/40）及び
小型仿製鏡出土層位（S=1/10）…… 19
第15図　１号住居跡出土土器実測図①（S=1/4）… 20
第16図　１号住居跡出土土器実測図②（S=1/4）… 21
第17図　１号住居跡出土土器実測図③（S=1/4）… 22
第18図　１号住居跡出土土器実測図④（S=1/4）
及び土製品・鉄器実測図（S=1/2）…… 23
第19図　２号住居跡・１号周溝状遺構ほか出土
土器実測図（S=1/4、８のみS=1/2）… 24
第20図　２号住居跡出土小型
仿製鏡実測図（S=1/2）…… 25

付図　小板井屋敷遺跡　５～８次調査区合成図

表 目 次

第１表　《小板井屋敷遺跡６》出土遺物観察表 … 29
第２表　《小板井屋敷遺跡７》出土遺物観察表 … 30

図 版 目 次

小板井屋敷遺跡６
図版１　①小板井屋敷遺跡６調査区全景（南東から）
②小板井屋敷遺跡６調査区全景（西から）
図版２　①１号住居跡完掘状況（北から）
②２号住居跡完掘状況（北から）
③２号住居跡遺物出土状況（北から）
④３号住居跡完掘状況（南東から）
⑤４号住居跡完掘状況（北から）
⑥５号住居跡完掘状況（北から）
図版３　①１号土坑完掘状況（北から）
②２号土坑完掘状況（北から）
③１・２号溝土層（東から）
④１・２号溝土層（西から）
⑤３・４号溝土層（北から）
⑥土坑状遺構完掘状況（北から）
図版４　出土遺物

小板井屋敷遺跡７
図版５　①小板井屋敷遺跡７調査区全景〈SC01〉
（北西から）
②小板井屋敷遺跡７調査区全景
〈SC02・SV01〉（南西から）
図版６　①１号住居跡土器集積上層（南西から）
②１号住居跡土器集積上層（南から）
③１号住居跡土器集積下層（南から）
図版７　①小型仿製鏡出土状況（西から）
②小型仿製鏡出土状況（南から）
③小型仿製鏡土層精査（南西から）
図版８　①小型仿製鏡土層精査詳細（南西から）
②小型仿製鏡背面検出
③小型仿製鏡背面検出状況
図版９　小型仿製鏡の取り上げ工程
図版10　出土遺物①
図版11　出土遺物②
図版12　出土小型仿製鏡

第１章　調査の経過と組織

１．調査の経緯と経過

〈小板井屋敷遺跡６〉

小板井屋敷遺跡６の発掘調査に至る発端は、小倉修氏より提出された個人住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会に始まる。これを受けて小郡市教育委員会では、申請地を対象に試掘調査を実施した結果、大型の遺構と土器片等が確認されるに至り、対象地に集落遺構の存在が想定された。この結果に基づいて、平成 25 年４月 12 日付けで、「埋蔵文化財発掘の届出について」が提出され、協議の結果、遺構に影響の出る範囲 70㎡について発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、平成 25 年４月 18 日から同年５月 17 日にかけて実施した。調査の主な経過は以下のとおり。

４月 18 日　重機による表土剥ぎ開始　４月 22 日　遺構掘削開始　５月８日　１・２号溝、１～３号住居跡完掘　５月 13 日　土坑状遺構検出　５月 14 日　全景写真撮影　５月 16 日　現場埋戻し　５月 17 日　調査完了

〈小板井屋敷遺跡７〉

小板井屋敷遺跡７の発掘調査は、石井勝範氏より提出された個人住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会に始まる。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である「小板井屋敷遺跡」に含まれるため、文化財保護法 93 条関係書類の提出を求めた（25 小教文第 3017 号　平成 25 年５月 10 日付）。平成 25 年５月 17 日付けで、「埋蔵文化財の発掘の届出について」が提出され、それを元に建築の協議を行い、基礎工事により遺構に影響が出る範囲 16㎡について発掘調査を行うこととなった。

発掘調査は平成 25 年６月 14 日から同年７月 16 日にかけて実施した。調査の主な経過は以下のとおり。

６月 14 日　表土剥ぎ開始　検出面で全面黒色土であり、遺構がすっぽり入っている可能性　６月 17 日　作業員動員　７月２日　住居貼床面まで下げ終わる。南東部においては土器が集積。７月９日　ＰＭ４：00～　調査区東側壁面より青銅器出土　７月 14 日　下層住居完掘、全景撮影、小型仿製鏡の取り上げ　表面をＢ-72 で補強、鏡全面の検出。鏡表面にガーゼを補強打ち。取り上げ後、周囲を土層毎切り取る。７月 16 日　調査完了　現場撤収

２．調査の体制

小板井屋敷遺跡６・７の調査体制は以下のとおり。

〈小板井屋敷遺跡６〉

【平成 25 年度】

小郡市教育委員会	教育長	清武　輝
	教育部長	佐藤秀行
文化財課	課長	片岡宏二
	係長	柏原孝俊
	技師	龍　孝明

【平成 26 年度】

小郡市教育委員会	教育長	清武　輝
	教育部長	佐藤秀行
文化財課	課長	片岡宏二
	係長	柏原孝俊
	技師	龍　孝明

〈小板井屋敷遺跡７〉

【平成 25 年度】

小郡市教育委員会	教育長	清武　輝
	教育部長	佐藤秀行
文化財課	課長	片岡宏二
	係長	柏原孝俊
	嘱託技師	坂井貴志

【平成 26 年度】

小郡市教育委員会	教育長	清武　輝
	教育部長	佐藤秀行
文化財課	課長	片岡宏二
	係長	柏原孝俊
	技師	山崎頼人

第２章　位置と環境

小郡市は福岡県中部に位置し、西側は佐賀県基山町に隣接する。小郡市の北半と三井郡大刀洗町のほぼ全域は古代における筑後国御原郡にあたる。筑後国は10郡からなり、筑後川以南の生葉郡、竹野郡、山本郡、下妻郡、三潴郡、上妻郡、山門郡、三宅郡の８郡。筑後川以北の御原郡と筑後川をまたぐ御井郡の２郡で構成される。国府は御井郡に所在し、御原郡は、筑前国、肥前国に接する位置であることから「三国」の地名が残っている。筑前国、肥前国、筑後国の国境は人為的な直線で結ばれていることが見受けられる。三国地域は脊振山系から派生する低丘陵地帯となっており、三国丘陵と呼ばれる。小郡市内の中央部を南北に宝満川が流れており、左岸側には朝倉山塊の末端である花立山が唯一の高所となっている。南部はこれら三国丘陵と花立山の下位に位置する低段丘地帯を経て、高度を下げながら平野部へいたる。

旧石器時代の遺跡は希薄ながら、市北部の三国丘陵麓と市北西部からの花立山山麓にみられる。小郡市内では旧石器時代の包含層は確認されていないが、筑前町の向原遺跡、金葺原遺跡、鬼隈遺跡などでナイフ型石器が、三国丘陵麓付近の津古土取遺跡、津古内畑遺跡、三国小学校遺跡、一ノ口遺跡などでナイフ型石器や細石刃が、市中心部でもわずかではあるが、台形石器が小郡中尾遺跡、津古上ノ原遺跡、三沢牟田々遺跡で１点ずつ表採されている。

縄文時代の遺跡は、旧石器時代と同様に三国丘陵麓と花立山麓を中心に展開している。前者では横隈山遺跡第４地点、津古土取遺跡、向築地遺跡があげられ、三沢北松尾口遺跡では早期の条痕文土器を伴う落とし穴が検出されている。後者では干潟遺跡、干潟向畦ヶ浦遺跡、干潟城山遺跡などがあり、落とし穴状遺構200基を検出している。これらの落とし穴状遺構は床面に杭を打ち込むものも認められるが､杭の配列にバラエティがみられる。そのほかに集石遺構や土壙などが検出されている。干潟向畦ヶ浦遺跡では１点ではあるが、草創期末の柏原式と命名された続円孔文土器が出土している。しかし、宝満川をさらにさかのぼった筑紫野市原遺跡では当該型式の資料がまとまって出土しており、二枚貝の貝殻条痕による調整や焼成などが類似しているほか、遺跡立地も河川に面した河岸段丘上であるなど共通点が見いだせる。小郡中尾遺跡からは早水台式の押型文土器が出土しているが遺構は確認されていない。大崎井牟田遺跡では、炉跡、竪穴状遺構、ピット数基が検出され、集落としての様相は掴めないものの下菅生Ｂ式の特徴をもつ土器が出土している。干潟遺跡・向畦ヶ浦遺跡からは田村式の資料が調査、採集されている。津古土取遺跡では晩期後半の黒川式土器、山の寺式土器、早期押型文の田村式、撚糸文土器が主体となり、そのほか早期末の平拵式、塞ノ神式、前期の曽畑式、中期の船元式、阿高式、西平式、後期の中津式、晩期突帯文などが出土している。

弥生時代前期には、三国丘陵上に位置する横隈鍋倉遺跡、横隈北田遺跡、三国の鼻遺跡からは朝鮮系無文土器が大量に出土しており、渡来人の移住や活発な交流がうかがえる。横隈北田遺跡は前期の環濠をもつ環濠集落である。環濠内には住居や袋状竪穴が検出されており、このような環濠をもつ例は横隈山第７地点、三沢南崎遺跡１次調査においても環濠と集落が確認されている。この時期の墓地としては、横隈狐塚遺跡Ⅱ、三国の鼻遺跡で前期前半の甕棺墓が検出されている。両者とも小型の小児用甕棺であり､成人用大型棺はいまだ出土していない。この時期の成人用の墓としては、三国の鼻遺跡の例でみると組み合わせ木棺が採用されている。

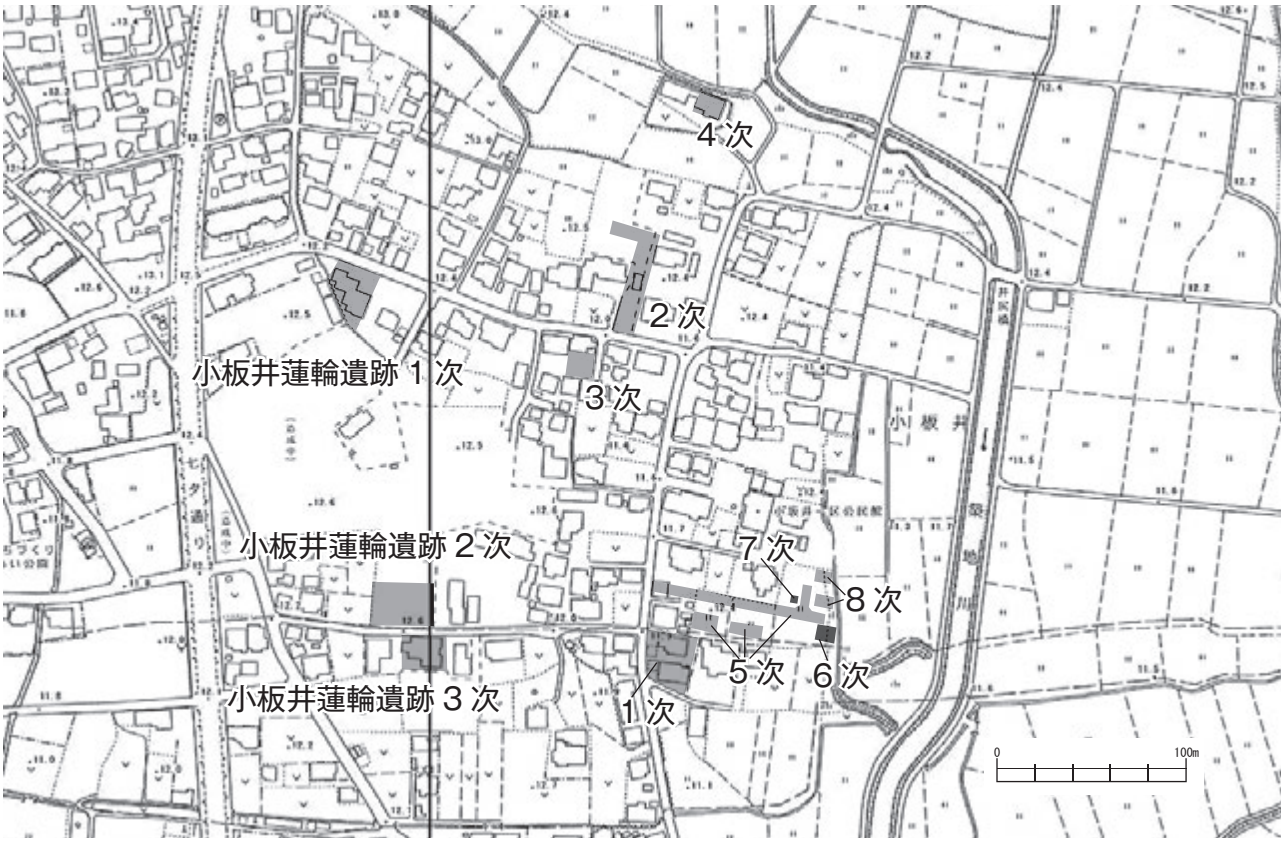
小郡市域における人びとの活動は弥生時代中期初頭までは市北部の三国丘陵上を中心に集落が営まれるが、中期初頭を境に三国丘陵での集落は一度断絶する。中期前半から後半にかけて、前段階の集落の多くは廃絶され、一ノ口遺跡などの一部の広い谷筋に限定されて展開する。中期後半以降、三国丘陵で再び小規模な集落が形成されるようになるが、集落の中心は現在の小郡市中心部に位置する大板井遺跡周辺の低台地上へと遷移する。大板井遺跡周辺は中期前半から中頃にかけて、集落形成が活発になり、住居が密集する傾向がある。遺構の分布範囲は南北700ｍ、東西900ｍの広範囲におよぶ。近隣の小郡若山遺跡３では、須玖Ⅰ式新段階のピットから多鈕細文鏡２面が出土している。中期前葉以降は丹塗り土器を出土する祭祀土壙が多数検出される特色が表れる。乙隈天道町遺跡では中期から古墳時代にかけての竪穴式住居を主体とした集落が形成され、市域南部でも低地の微高地上に集落が点々と営まれている。宝満川左岸でも前期末から中期後半代にかけてほぼ間断なく集落が営まれており、安定した様相を示している。

第１図　周辺遺跡分布図（S=1/50,000）

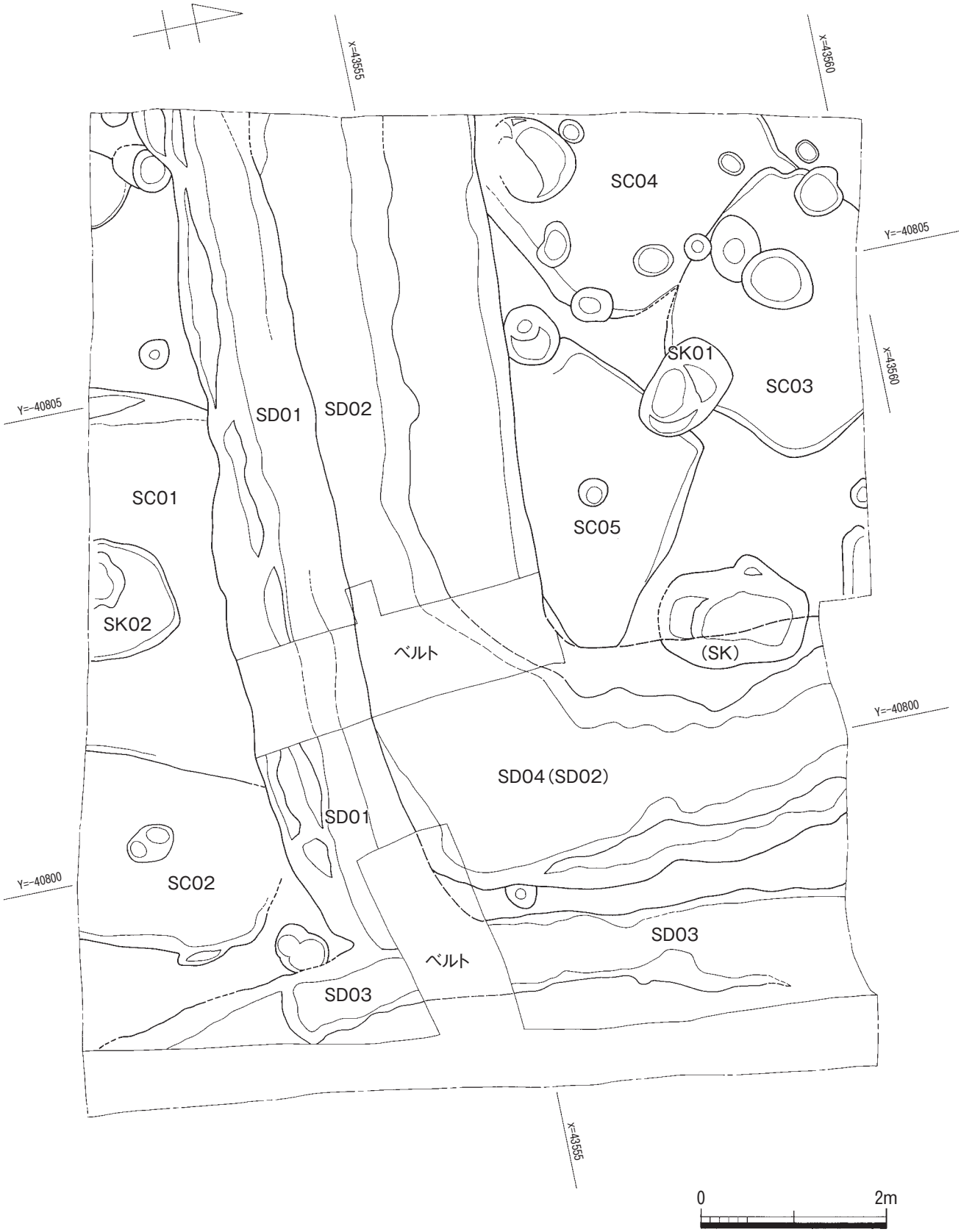
小板井屋敷遺跡は、大板井遺跡から南に約１㎞の宝満川によって形成された解析谷の河岸段丘上に位置する。当遺跡は宝満川の氾濫原であり、宝満川及びその支流である築地川の氾濫によって河岸段丘が浸食を受けている。度重なる氾濫と多量の遺物を含む包含層の堆積土によって、検出を非常に困難なものとしている。弥生時代以降断続的に営まれた集落であり、切り合いも多い。過去５次にわたる調査が実施されており、８次調査まで実施（６～８次調査は今年度報告書刊行）されている。１次調査では弥生時代後期後半から古墳時代初頭の集落跡、２次調査では古代の集落跡、中・近世の溝が検出されている。３次調査では中・近世の溝と土坑、４次調査区は遺跡北端に位置し、古墳時代前期・後期の土坑、住居跡が検出されている。５次調査では、弥生中期の小児棺、住居跡、弥生時代後期から古墳時代初頭の住居跡、中・近世の土坑、溝が検出されており、小板井屋敷遺跡およびその周辺における集落変遷のあり方が明らかになりつつある。

２・３・５次調査で検出された大溝は小板井屋敷遺跡周辺にもみられ、小板井京塚遺跡、稲吉元矢次遺跡、大崎小園遺跡、大崎東柿添遺跡などで中世の区画溝と考えられる大溝が検出されている。稲吉元矢次遺跡では、青磁・白磁といった中国・朝鮮半島からの輸入陶磁器が大量に出土しているほか、東播系須恵質土器や常滑焼などの搬入品も多くみられる。そのほかに多量の鉄滓や焼土、炭から小鍛冶が行われた可能性も指摘されており、周辺遺跡とは一線を画している。

近世には筑前から津古、横隈、大板井を経由して久留米、柳川へ抜ける横隈街道が主要な交通路であった。また、肥前から小郡町、松崎町を経由して秋月へ抜ける秋月街道が延宝元（1673）年に整備されている。同年、松崎藩主有馬伊予守豊範は松崎を宿場町とする松崎街道の開設を計り、延宝６（1678）年には、松崎街道が開通した。これにより、それまで主要道として機能していた横隈街道に代わる天下道となる。小板井屋敷遺跡はこの横隈街道、秋月街道と英彦山へと抜ける英彦山道の分岐点に近接しており、交通の要衝であったことがうかがえる。



第２図　小板井屋敷遺跡６・７調査区配置図（S=1/4,000）



第３図　小板井屋敷遺跡６全体図（S=1/60）

第３章　小板井屋敷遺跡６・７調査の概要

小板井屋敷遺跡６で検出された主な遺構は竪穴式住居５軒、土坑２基、溝３条、土坑状遺構１基である。周辺の発掘調査によって弥生時代中期以降、断続的ではあるが集落が営まれており、遺物の出土量は多い。しかしながら、調査区の東を流れる宝満川とその支流である築地川の氾濫によって、遺跡の立地する河岸段丘は部分的に浸食されている。

小板井屋敷遺跡７は調査面積16㎡と矮小な面積であり、住居跡の内部を調査する形となった。そのなかでも切り合いを有しており、１号周溝状遺構→２号住居跡→１号住居跡と大きく３段階の遺構が重複し、累積していた。また、調査区の壁面から小型仿製鏡が出土した。２号住居跡の埋土中からの出土である。

なお、周囲の調査区では住居の密度が高く、この重層的な住居の重なりを捉えきれずに飛ばしている可能性が高い。

第４章　小板井屋敷遺跡６の調査

１．住居跡

１号住居跡（第４図　図版２－①）

１号溝、２号土坑に切られる竪穴式住居である。２号住居跡を切るが、上面では切り合い関係が不明瞭であったため調査区壁際にトレンチを掘削し、切り合い関係を確認した。現況で幅3.83m、深さは最大25㎝を測る。南側は調査区外へとつづく。西壁にテラス状の段がつくが用途不明である。覆土包含層中から弥生時代中期の甕、高坏、器台が出土している。２号住居跡との切り合い関係から住居に伴うものではない。

２号住居跡（第４図　図版２－②）

調査区南端で検出した竪穴式住居である。１号住居跡、１号溝に切られ、南側は調査区外へとつづく。東側は河川浸食を受ける。平面プランは不明であるが、現況で幅2.02mを測る。床面で主柱穴と考えられるピットを検出している。検出段階では１号溝との切り合い付近で焼土の広がりがみとめられ、カマドが存在していた可能性があるものの、カマド本体は溝に切られており確認できなかった。

調査区南壁付近の床面直上で須恵器坏１点が出土した。そのほか１号住居跡と同様に弥生中期の甕口縁部、底部などが覆土中から出土しているが、すべて包含層中に含まれる混入品である。出土遺物から２号住居跡の帰属時期は８世紀後半から末頃と考えられる。なお、貼床中から弥生中期の甕底部が出土していることから、弥生時代中期以降の包含層を掘削した住居である。

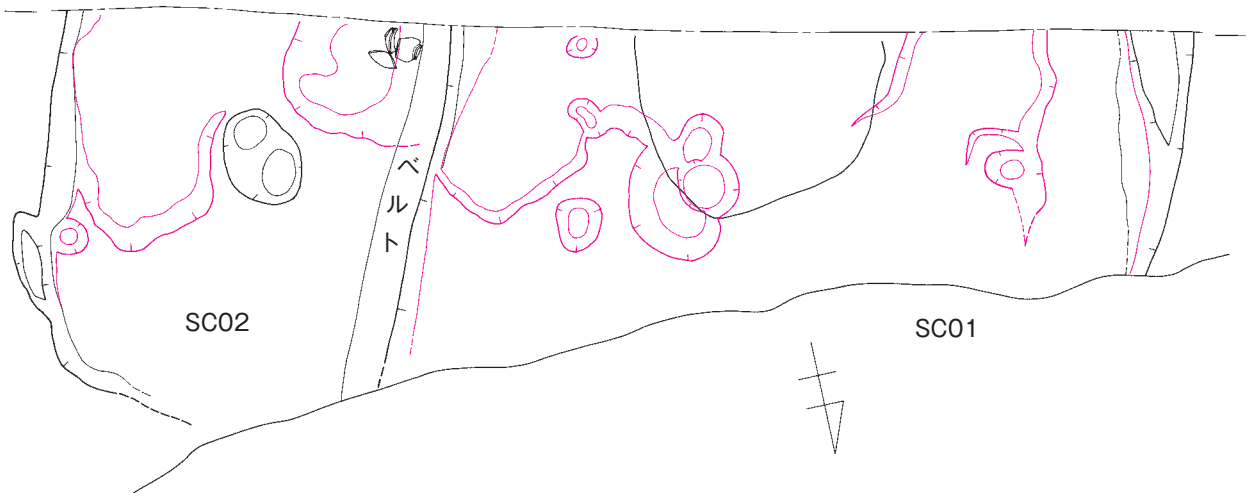
出土遺物

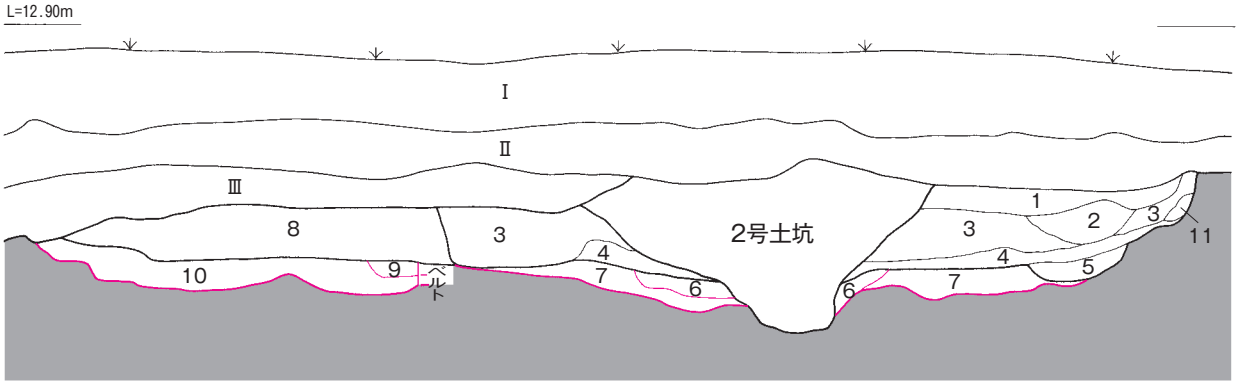
土器（第６図　図版２－③・４－１・２）

１は須恵器坏で床面直上から、２は甕底部で貼床中から出土した。１は須恵器の坏である。口径21.3㎝を測る。底部には薄手の高台が付く。体部から口縁部は直線的にのび、口縁端部はわずかに外反する。体部内外面は回転ナデ、底部内面は強い仕上げナデによる調整が行われ、いずれも指頭圧痕、指ナデの痕跡が明瞭に残るなど、器面調整はやや粗雑である。２は甕底部である。

３号住居跡（第５図　図版２－④）

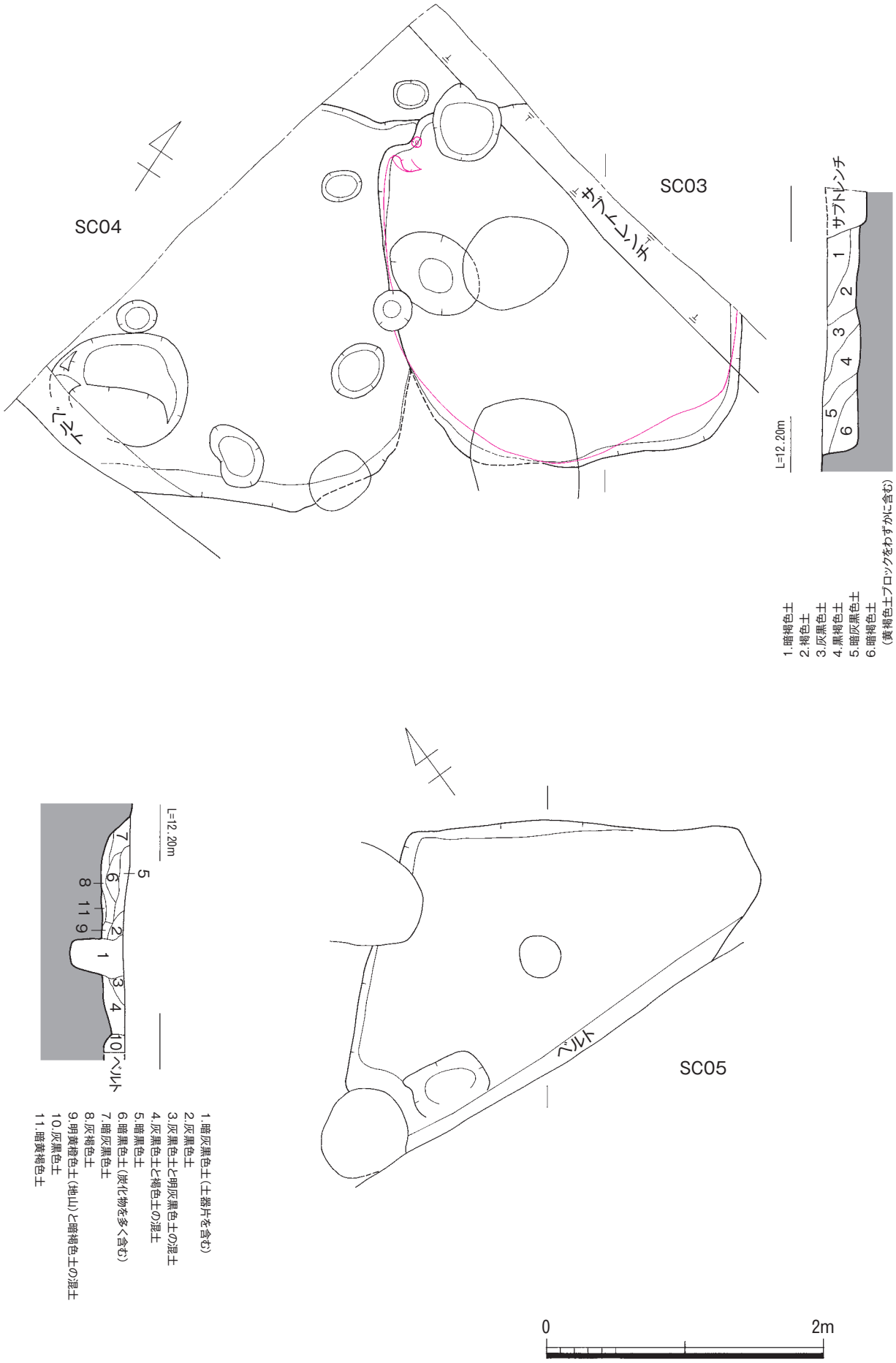
１号土坑に切られ、４号住居跡を切る。平面プランが不明瞭であるが、一辺約2.52mの隅丸方形を呈する竪穴式住居である。深さは最大で30㎝を測る。主柱穴等は確認できなかった。当初４号住居跡と同一と考えていたため、埋土中上層の遺物は一部混在している。



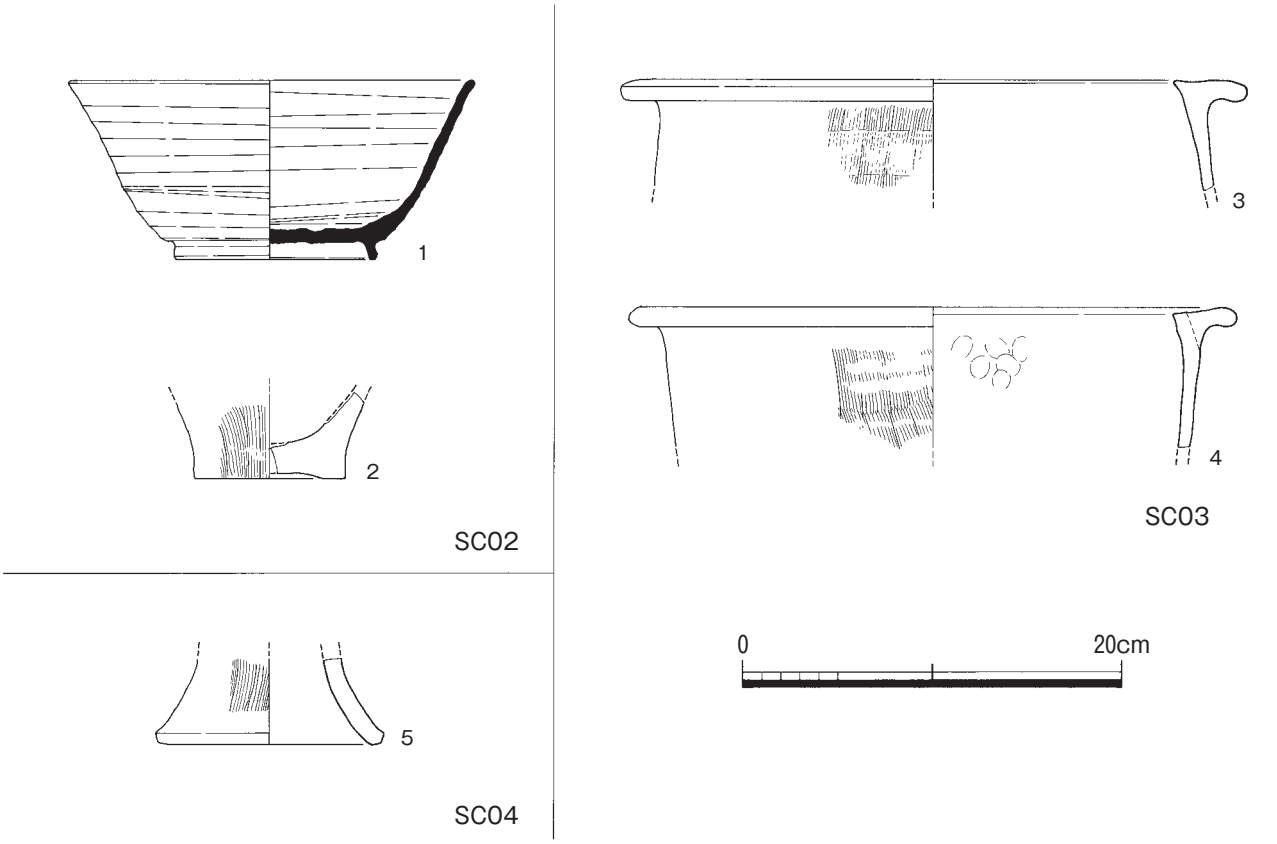


Ⅰ.表土
Ⅱ.包含層
Ⅲ.河川浸食による堆積土（粘質土と砂層の互層堆積）
1.暗灰黒色土
2.暗灰黒色土（黄褐色土が混ざる）
3.暗褐色土（黄褐色土ブロックが少し混ざる）
4.暗褐色砂質土
5.灰黒色土（明黄褐色土ブロックをやや多く含む）
6.淡灰黒色砂質土
7.1号住居跡貼床
8.灰黒色土（土器片をやや多く含む）
9.黒褐色土
10.2号住居跡貼床
11.注記もれのため不明

第４図　１・２号住居跡実測図（S=1/40）



第５図　３～５号住居跡実測図（S=1/40）



第６図　２～４号住居跡出土土器実測図（S=1/4）

出土遺物

土器（第６図　図版４－３・４）

３、４は甕である。３、４とも反転復元した図であるが、口径 32～33㎝程度となる。４は歪みが大きいため、やや外傾する口縁部を呈しており、鉢状の形態となっているが、実際はやや直立する体部になるものと考えられる。

４号住居跡（第５図　図版２－⑤）

調査区北西端で検出した竪穴式住居跡で２号溝、３号住居跡に切られる。３号住居跡との切り合い関係は非常に不明瞭であった。切り合い関係が明らかになったのは貼床検出段階である。現況で幅 2.90m、深さは最大で 23㎝を測る。ピット、土坑を床面で検出している。土坑は住居に伴う屋内土坑の可能性がある。床面の高さは３号住居跡よりわずかに高い。

出土遺物

土器（第６図）

５は４号住居跡ピット中から出土した高坏脚部である。内外面とも浅黄橙色を呈し、底部は復元径で 12㎝程度となる。

５号住居跡（第５図　図版２－⑥）

調査区中央付近で検出された。平面プランおよび周辺の遺構状況から竪穴式住居と判断した。平面プランは歪みのある方形を呈する。２号溝、１号土坑に切られる。東側は河川の浸食および２号溝に切られるが、プラン不明瞭である。一辺約 2.32m以上、深さは最大で 24㎝を測る。貼床および柱穴は確認できなかった。住居跡中央付近をピットに切られる。１～４号住居跡と異なり貼床は確認できなかった。出土遺物なし。

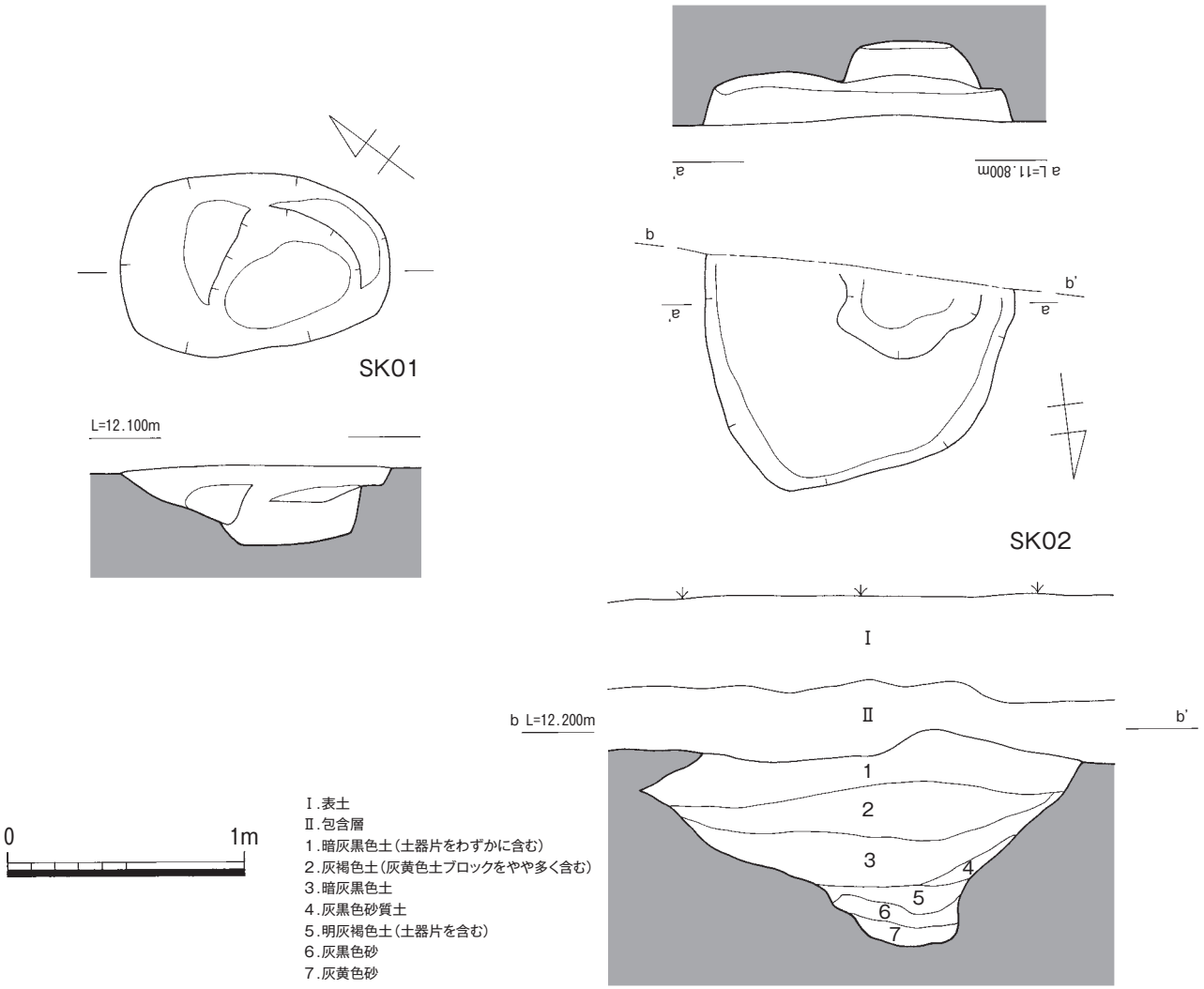
２．土坑

１号土坑（第７図　図版３－①）

調査区中央北西寄りで検出された平面プラン楕円形の土坑である。東側はテラス状の段がつき、北西側へ緩やかに立ち上がる。埋土は暗褐色土の単純土層で土器片を多く含む。出土した土器はいずれも小片であり、図示しえなかった。

２号土坑（第７図　図版３－②）

１号住居跡を切る土坑で南側は調査区外へとつづく。現況で幅1.3m、深さは最大で37cmを測る。立ち上がりは明瞭で、南側には一段の落込みが認められる。埋土は自然堆積と考えられるが、下層の第16~18層は砂層が堆積する。出土遺物は上層と砂層の境にあたる第16層から多く出土した。しかしながら、当初は住居の一部と考えていたため上面で検出できておらず、１号住居跡掘削中に別遺構と確認したものである。１号住居跡の遺物が混入している可能性がある。埋土中に多量の弥生土器を含むが、１号住居跡との切り合い関係から、いずれも包含層からの混入品と考えられる。



第７図　１・２号土坑実測図（S=1/30）

３．溝

１号溝（第８図　図版３－③・④）

調査区を東西に走る溝で幅0.9～1.38m、深さは最大で58cmを測る。床面は凹凸が多いものの、西端から東側まで比高差はほとんどみられない。埋土の差から２号溝を切っていると考えたが、２号溝との位置関係と土層観察の結果、２号溝の掘り直しと考えられる。

調査区西壁の土層（a-a’）観察では第５～11層が１号溝にあたる。上面の第１～４層は弥生時代中期の遺物を多量に含む包含層である。第７～11層は自然堆積と考えられるが、第６層はブロック状に堆積することから人為的な埋戻しであった可能性が考えられる。調査区中央付近（b-b’）では第１～９層が該当する。第４～６層にブロック状の堆積がみられ、埋土にもブロックが混ざる。上層では自然堆積の様相を見せている。１号溝は埋没途中に人為的に埋め戻されたものと考えられる。埋土中に弥生土器から近世陶磁器まで多量の土器が混在しており、層位による出土遺物の時期差もみられない点から、周辺の遺物包含層を掘削して人為的に埋め戻されたのであろう。上層が自然堆積である点から、ある程度の深さまで埋められた後はそのままとなっていたのであろう。出土遺物から近世の所産と考えられるが、当該時期の遺物は極めて少なく確証はない。確実に１号溝に伴う遺物で図示しえたものは陶器皿１点である。

出土遺物

土器（第９図　図版４－13）

１は陶器丸皿である。底部から体部のみ残存。胎土は極めて精良。外面には灰釉が薄くかかり、黄色に発色する。16世紀末頃か。

２号溝（第８図　図版３－③・④）

１号溝に切られる大型の溝で、現況で幅2.3m、深さは最大で93cmを測る。最低１回の掘り直しが行われていることが土層から明らかであるが、検出段階では確認できなかったため、出土遺物を分けておらず新旧溝それぞれの帰属時期は不明である。２号溝と１号溝は並行しており、出土遺物も１号溝と同じ様相を呈することから、時期差はあるが同一の性格をもつ溝と考えられる。調査区西壁の土層（a-a’）では、第19～27層が新しく掘り直した溝で、便宜上２号溝（新）と呼称する。埋土はブロック状の堆積を示しており、人為的に埋め戻されたものと考えられる。第15～18層は溝埋没後に堆積した包含層である。調査区中央の土層（b-b’）では第10～14層が該当する。

２号溝（旧）と呼称する。２号溝（新）と１号溝に切られる。これら溝の中でもっとも規模が大きいと考えられるが、両端を切られているため本来の規模は不明である。切り合い関係から溝の中でもっとも古いと考えられる。調査区西壁の土層では第29～45層が該当し、第36層以下は自然堆積と考えられる。最下層の第40層以下は粘土と砂の互層堆積をなしている。上層は１号溝、２号溝（新）と同様ブロック状の堆積を呈しており、人為的に埋め戻されたのであろう。調査区中央（b-b’）では第15～25層が該当する。

出土遺物

土器（第９図　図版４－13）

２は下層から出土した白磁である。口縁部のみの残存であるが鉢であろう。口縁端部は肥厚させ、やや玉縁状を呈す。残存部位に釉薬はみられず、すべて露胎する。３は磁器碗である。体部外面は施釉後ヘラ削りが行われる。見込みには砂粒が付着しており、砂目積みである。17世紀初頭頃か。

３号溝（第８図　図版３－⑤）

調査区西端で検出された溝である。東側はコンクリートのＬ字擁壁設置に伴う撹乱を受けており、幅は不明である。上面は河川浸食によって削られているが深さは検出面から最大で42cmを測る。調査区東側の土層（c-c’）

では第７～13 層に該当する。並行する４号溝を切る。上面の第１～４層は河川浸食で土層を細分していないが、暗褐色土を基調とした粘土と砂の互層堆積である。３号溝と１号溝の接続点はわずかに比高差があり、３号溝がやや低いが、切り合い関係はみとめられないことから、１号溝と一連の溝と考えられる。出土遺物は少なく図示しえたものはない。

４号溝（第８図　図版３－⑤）

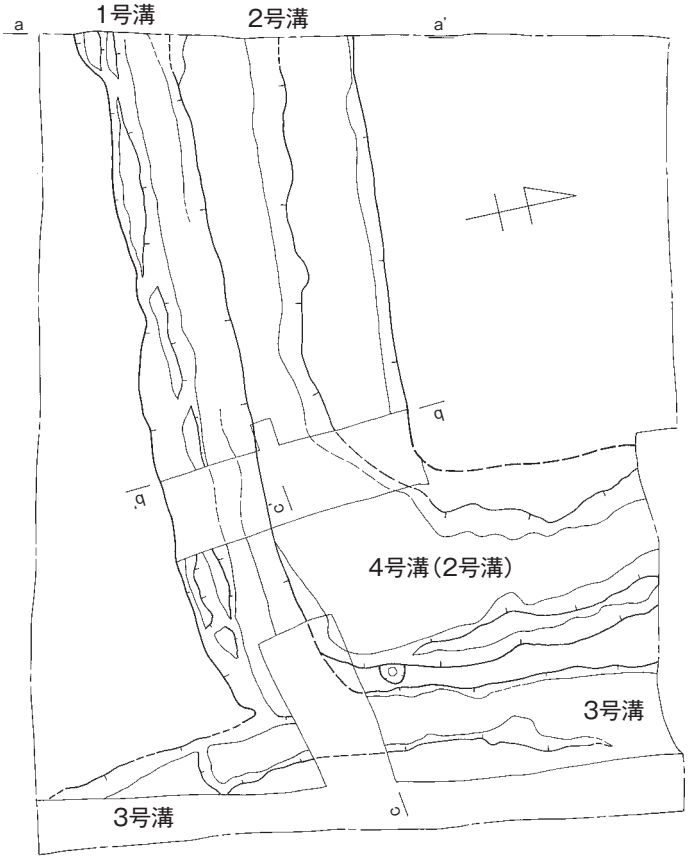
調査の都合上４号溝と番号を付したが、２号溝と同一遺構である。土坑状遺構を切るが、上面は河川浸食によりプラン不明瞭である。１号溝と３号溝が接続する箇所で３号溝に並行して北側へと屈曲する。北壁付近は上面の撹乱が著しく、４号溝と並行すると考えられる２号溝（新）が平面・断面ともに不明瞭であったため、方向を確認できていない。

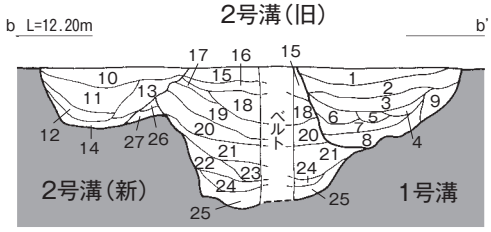
調査区東側の土層（c-c'）では第 17～32 層が該当する。このうち第 17～24 層、第 25～27 層、第 28～32 層で土層に不整合がみとめられることから、掘り直しもしくは流水により壁面が削られた可能性が考えられる。土層が観察できたのはこの地点のみであったため、詳細は不明である。遺物出土量は極めて少ないが下層から磁器鉢が出土した。

出土遺物

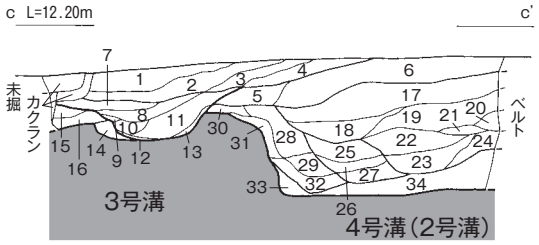
土器（第９図　図版４－ 13）

５は小片であるが磁器鉢と考えられる。口径は 17㎝前後になろうか。口縁端部は折り曲げ、玉縁状に肥厚させる。ややつくりが粗い。17 世紀末頃か。

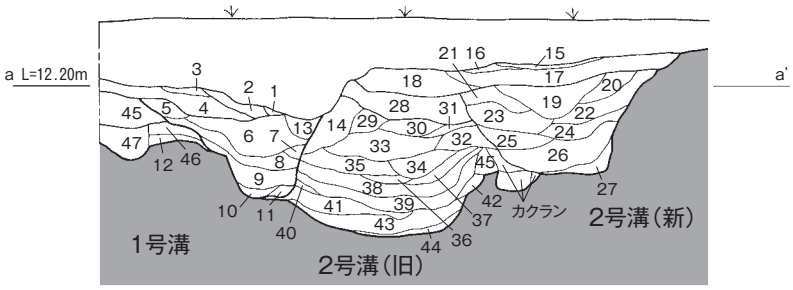




1.褐色土
2.暗褐色土
3.暗褐色土（土器片を含む）
4.暗褐色土（灰黄色土ブロックを含む）
5.灰黒色土
6.灰黒色土（灰黄色土ブロックを含む）
7.淡灰黒色土
（灰黄色土ブロックを多量に含む）
8.灰黒色土
9.暗灰黒色土
10.褐色土
11.褐色土
12.暗褐色土
13.灰黒色砂質土
14.褐色土
15.暗褐色土
16.暗褐色土（第15層より明るい）
17.暗褐色土（第16層より淡い）
18.暗褐色土（第16層より暗い）
19.暗褐色土（土器片をやや多く含む）
20.暗褐色土（第18層より暗い）
21.灰黒色土（土器片をやや多く含む）
22.暗褐色土
23.灰黒色土
24.褐色土
25.明黄橙色砂と灰褐色砂の混土
26.暗褐色土と黄褐色土の混土
27.黄褐色土と暗褐色土の混土



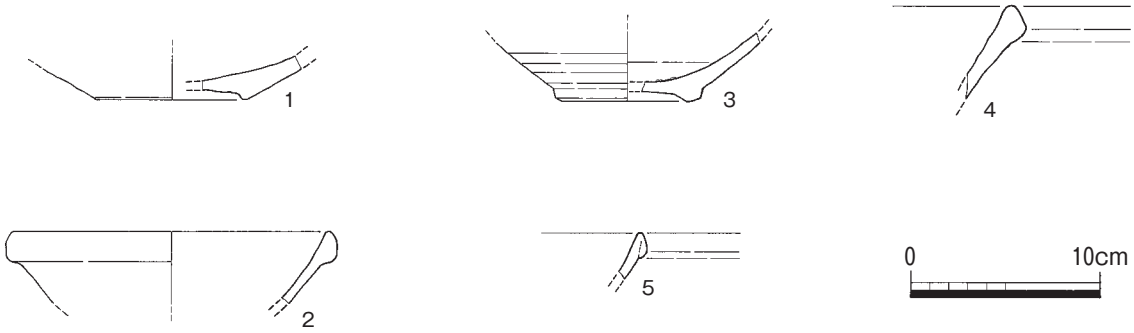
1.暗褐色土
2.暗褐色土（土器片を多く含む）
3.暗褐色土（黄褐色土ブロックを含む）
4.暗褐色土
5.灰黒色土
6.暗褐色土（土器片をわずかに含む）
7.暗褐色土
（黄褐色土ブロックをやや多く含む）
8.暗褐色土（土器片をわずかに含む）
9.灰黒色土
10.暗灰黄色色砂質土
11.褐色土
12.黄灰色砂
13.暗灰黒色土
14.明黄褐色土（灰黒色土が混ざる）
15.暗褐色土
16.灰黒色土
（黄褐色土ブロックをやや多く含む）
17.暗褐色土（第6層より明るい）
18.濃褐色土
19.暗褐色土
（土器片をわずかに含む）
20.暗灰黒色土
21.灰黒色土
22.褐色土
23.暗褐色土（土器片を少し含む）
24.暗褐色土
25.暗灰黒色土
26.暗褐色土
27.暗褐色土
（暗黄褐色土がわずかに混ざる）
28.灰黒色土
29.灰黒色土（黄褐色土が混ざる）
30.暗灰黒色砂質土
31.明黄褐色土（灰黒色土が混ざる）
32.灰白色砂（灰黒色土が混ざる）
33.明灰白色砂
34.褐色土



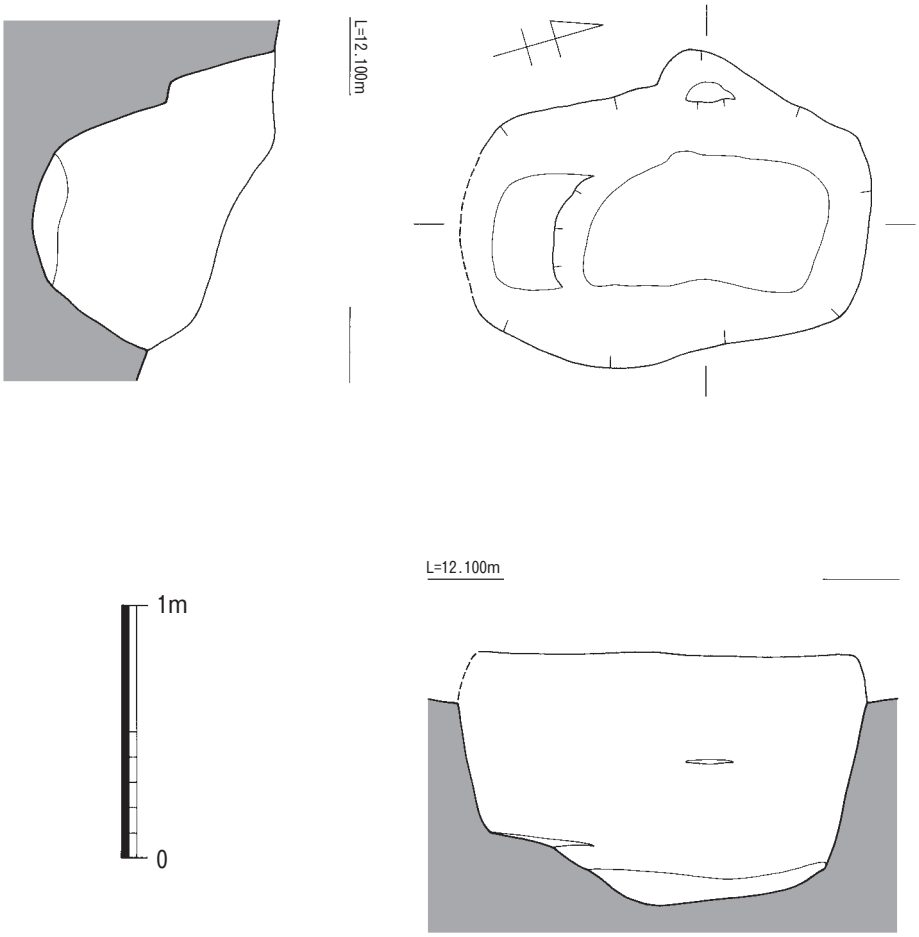
1.暗褐色土
2.暗褐色土
3.褐色土
4.褐色土（第3層より暗い。土器片を含む）
5.褐色土
6.暗褐色土
7.褐色砂質土
8.暗褐色土（明黄褐色土ブロックを少し含む）
9.暗褐色砂質土
10.淡灰黒色砂質土
11.明灰黒色砂質土
12.灰黒色土（黄褐色土ブロックをやや多く含む）
13.第6層に表土が混ざる
14.暗褐色土
15.褐色土
16.褐色土（第15層より暗い）
17.褐色土（土器片を含む）
18.褐色土（根による撹乱を受ける）
19.暗褐色土（土器片をわずかに含む）
20.明褐色土
21.褐色土
22.褐色土（土器片を少し含む）
23.褐色土（土器片をわずかに含む）
24.褐色土（黄褐色土が少し混ざる）
25.暗褐色土
26.暗褐色土（土器片を含む）
27.暗褐色土と黄褐色土の混土
28.褐色土
29.褐色土
30.暗褐色土
31.暗褐色土（土器片を含む）
32.暗褐色土（第31層より暗い）
33.褐色土（土器片をやや多く含む）
34.褐色土
35.褐色土（第34層より明るい）
36.暗褐色土
37.褐色土（混入物がほとんど入らない）
38.暗褐色土
39.暗褐色土（第38層より暗い）
40.灰色粘質土
41.極暗褐色土
42.灰黒色砂と明黄橙砂の混土
43.暗灰黒色砂質土
44.灰黒色砂質土
45.暗褐色土
46.暗褐色土
47.暗褐色土

0 2m

第８図　１～４号溝実測図・土層図（S=1/100、土層図はS=1/60）



第９図　１～４号溝出土土器実測図（S=1/4）

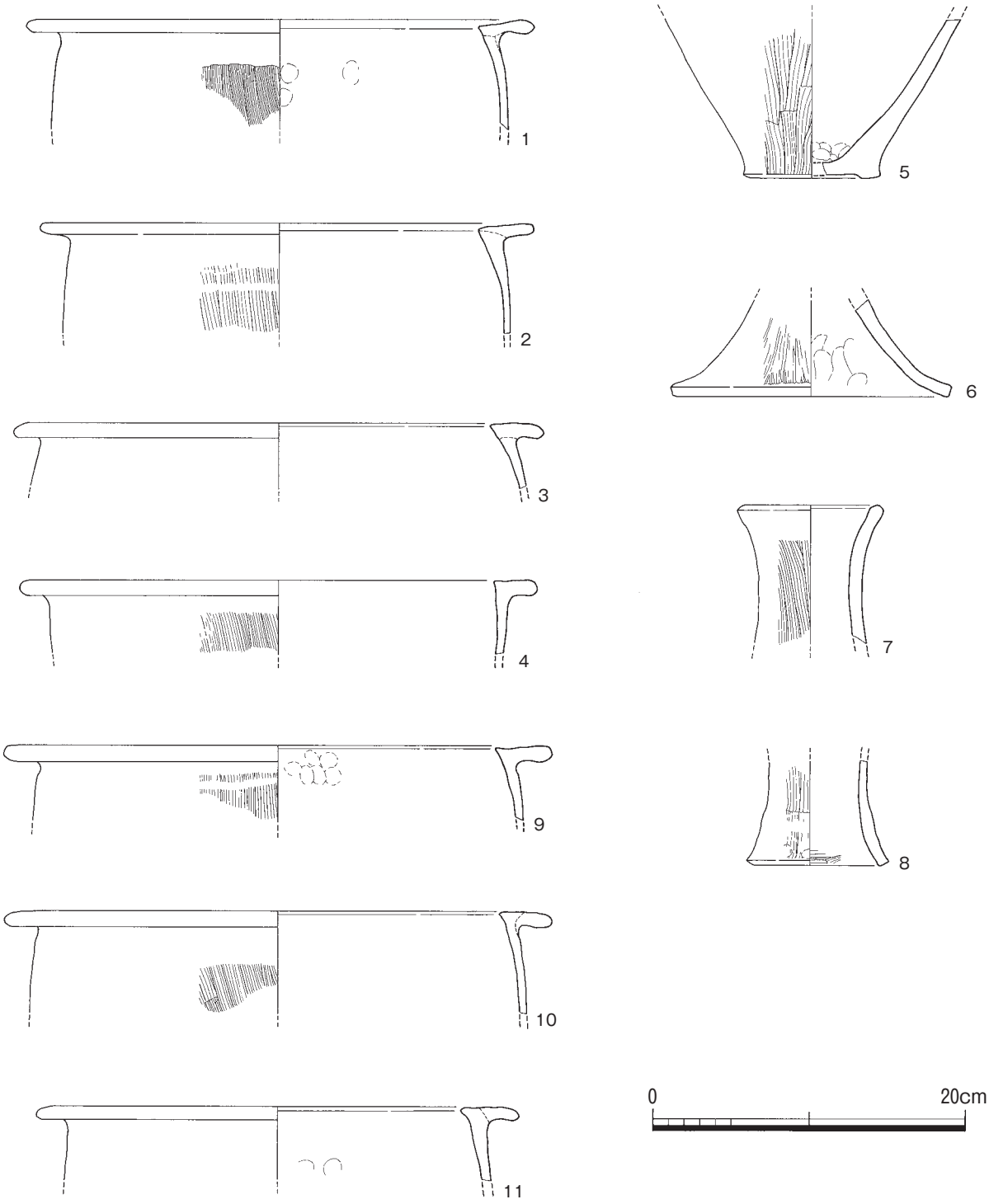


第 10 図　土坑状遺構実測図（S=1/30）

4．不明遺構

土坑状遺構（第10図　図版3－⑥）

4号溝掘削中に検出した土坑状遺構である。上面は4号溝によって削られる。平面プラン不整楕円形で、南側にテラス状の段がつく。規模は長軸1.60m、短軸は1.10～1.18mで、深さは最大98cmを測る。埋土は上層から下層まで地山ブロックを含んでおり、人為的に埋められたものと考えられる。床面は4号溝とほぼ同じ深さであり、井戸の可能性もあるが、埋土中からは炭化物や有機物層、湧水等もみとめられなかった。



第11図　包含層出土土器実測図（S=1/4）

５．その他の遺構と遺物

調査区からピットが11基検出されたが、遺物が出土したピットは５基のみである。また、いずれの出土遺物も埋土中から出土した細片であり、各遺構の帰属時期を示すものではない。

また、各遺構埋土から弥生時代中期を中心とした多量の土器が出土している。１号住居跡覆土と５号住居跡覆土の出土遺物が接合するなど、遺構面全体を覆う包含層中の遺物は後世に混入したものと考えられる。以下、図示可能な遺構覆土からの出土遺物を示す。

出土遺物

土器（第11図　図版４－５～12）

１から５は甕、６は高坏、７、８は器台で、１号住居跡から出土した。９は甕で２号住居跡から、10、11は甕で２号土坑から出土した。

６．小結

本調査区では、弥生時代から古代にかけての竪穴式住居と近世の溝を確認した。各遺構の時期は、出土遺物および規模から２号住居跡が８世紀後半段階、１号住居跡がそれ以降、３・４号住居跡が弥生時代後期頃の所産と考えられる。５号住居跡は時期不明である。２号住居跡は焼土が確認されたことから北壁付近にカマドが付属した可能性がある。１号土坑は３、５号住居跡を切ることから弥生時代以降、２号土坑は切り合い関係および土層から１号住居跡より後出し、古代以降の所産である。１～４号溝は近世の所産で、出土遺物より16世紀末から18世紀前半までの時期があたえられる。

調査区のうち２号住居跡南西端から５号住居跡東半以東は、遺物を包含する褐色の埋土に覆われ、地形は東側へと緩やかに傾斜する。この傾斜地の堆積土は砂層と遺物包含層の互層堆積である。小板井屋敷遺跡の立地する河岸段丘に築地川の氾濫に起因する浸食が繰り返された結果であろう。この浸食によって遺構面はやや起伏に富んだものとなっており、遺構検出を非常に困難なものとしている。今回の調査で検出した遺構面は、本来の遺構面から25～40㎝程度下がったところとなっている。

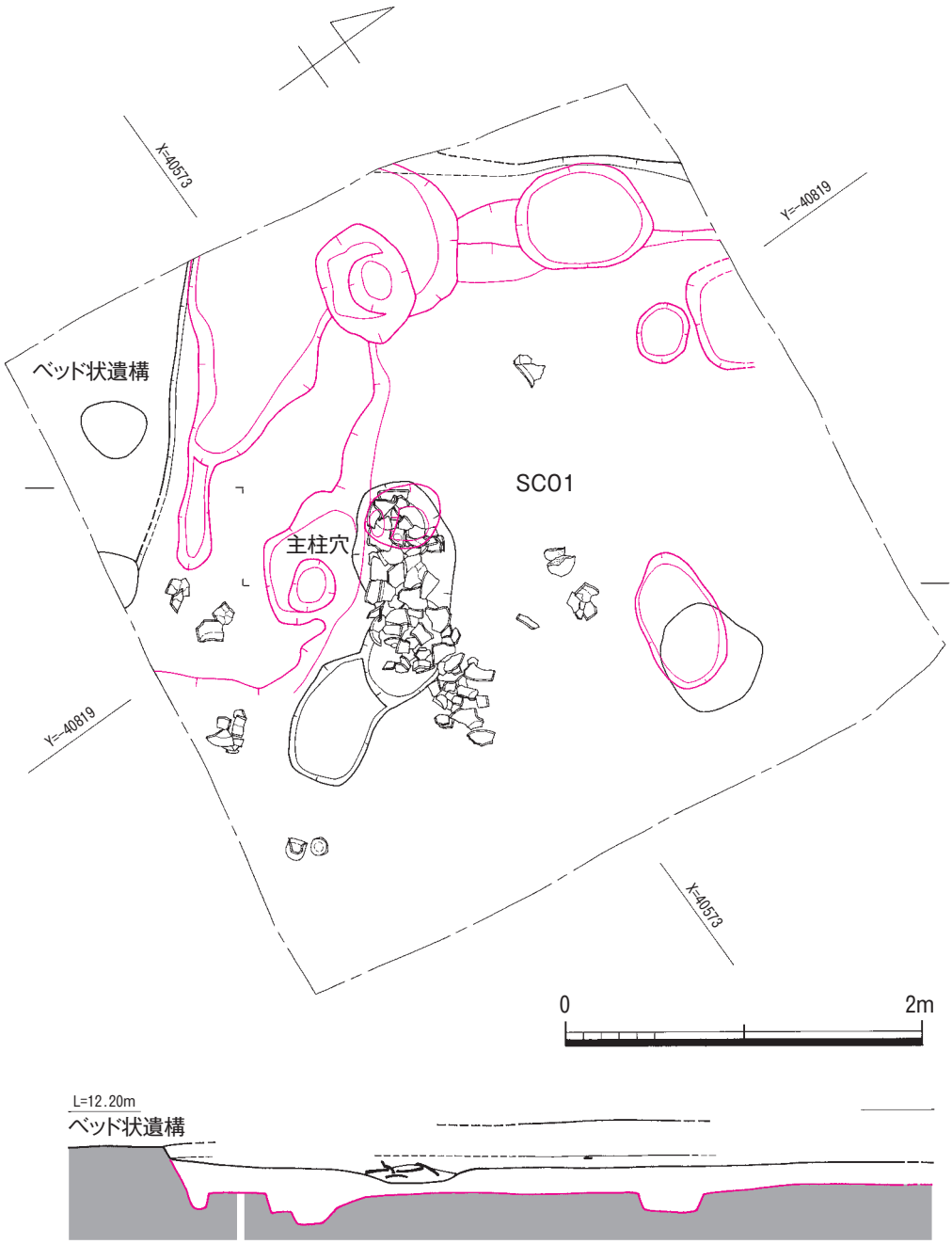
第５章　小板井屋敷遺跡７の調査

１．住居跡

１号住居跡（第 12 図　図版５・６）

調査区内にすっぽりと住居跡が入っており、規模を復元すると住居跡の南西側およそ半分を検出したことになる。

南西側でベッド状遺構の一部がかかっている。おそらくは、南西－北東方向の主軸を持つ長方形住居でその短辺両側、もしくは南西・南東・北東の３辺に造り出しのベッド状遺構を持つものであろう。検出面から床面までの深さは 20cm程度である。主柱穴は南西側で１基検出した。床面ではわからなかったが、貼床下の掘り込みから



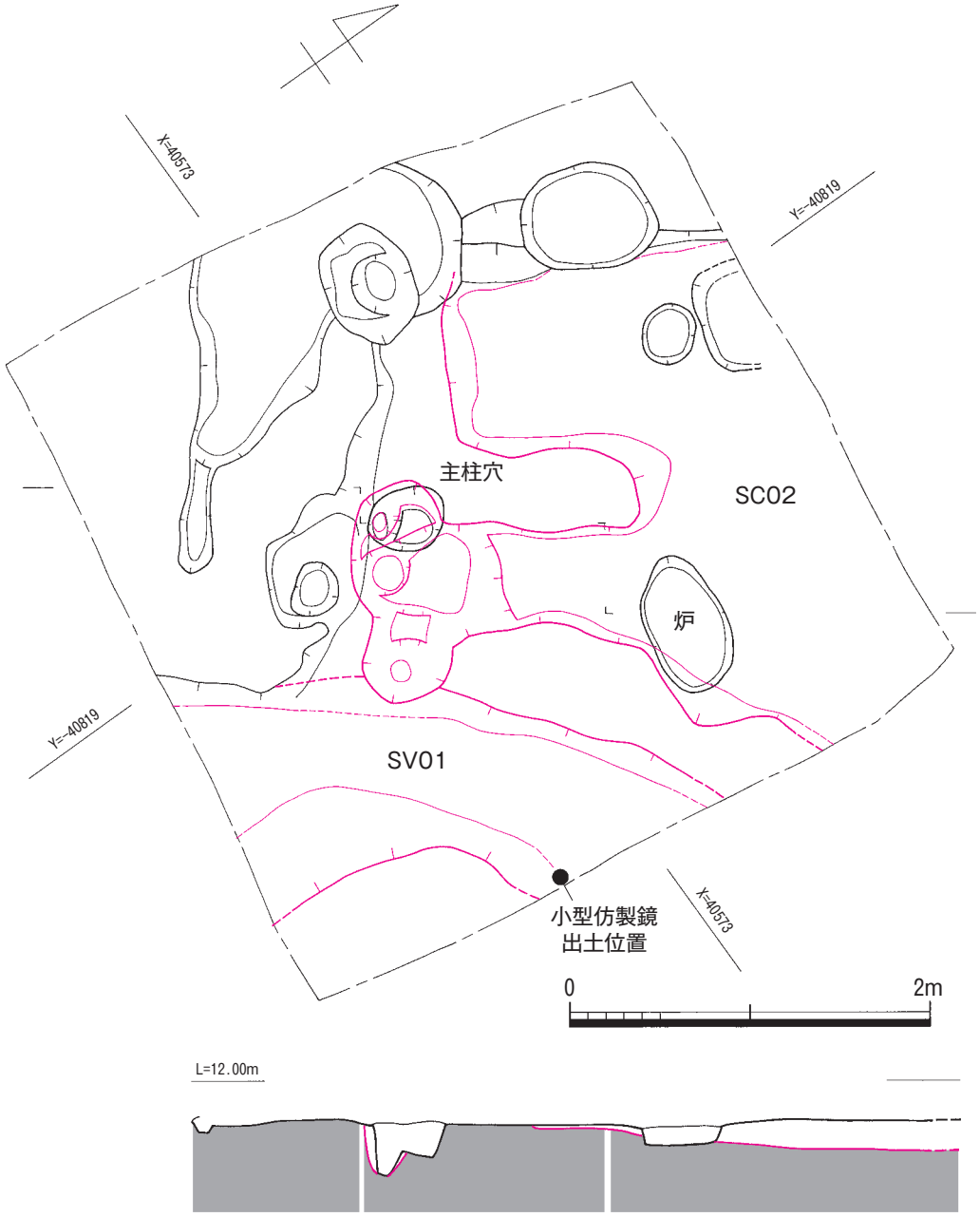
※土器は断面のみ図化

第 12 図　１号住居跡平・断面図（S=1/40）

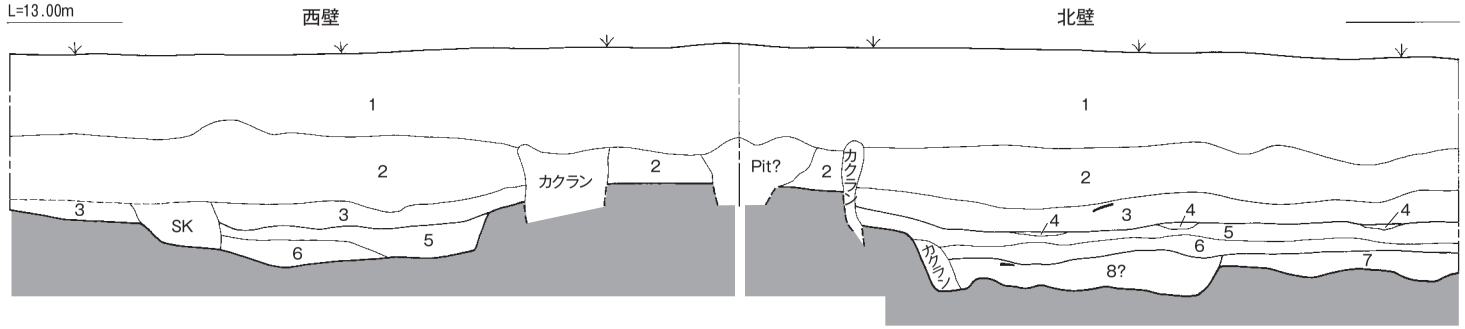
主柱穴であったと想定される。長軸 70cm×短軸 50cmの長楕円形で深さは 30cm程である。炉は浅いものがあった可能性が考えられるが、うまく検出できなかった。

貼床は 10cm程度で、下層遺構の影響もあり黒茶褐色土に地山の黄橙色粘土ブロックが多く入る貼床層である。部分的にその上層に黄灰色砂層がみられ、整えられている。

１号住居跡の埋土からは多くの土器がまとまって出土している。調査区の南東隅から１m幅で北西に向けて３m近い範囲でまとまって出土した。埋土中から床面までの連続した接合例が確認でき、１号住居の埋没過程で簡易な掘り込みを行い投棄された土器群と考えられる。その掘り込みは１号住居跡の床面にも到達しており、南西側の主柱穴付近に楕円形の掘り込みが３つ連結しており、土器の分布と重なる。これらの土器群は１号住居跡に直接伴うものではなく、埋没過程の掘り込みに投棄されたものである。完形に復原できるものも多い。なお、検出段階（埋土直上層）から土器群が見えており、それらも含めて一括して「土器集積」として取り上げた。しか

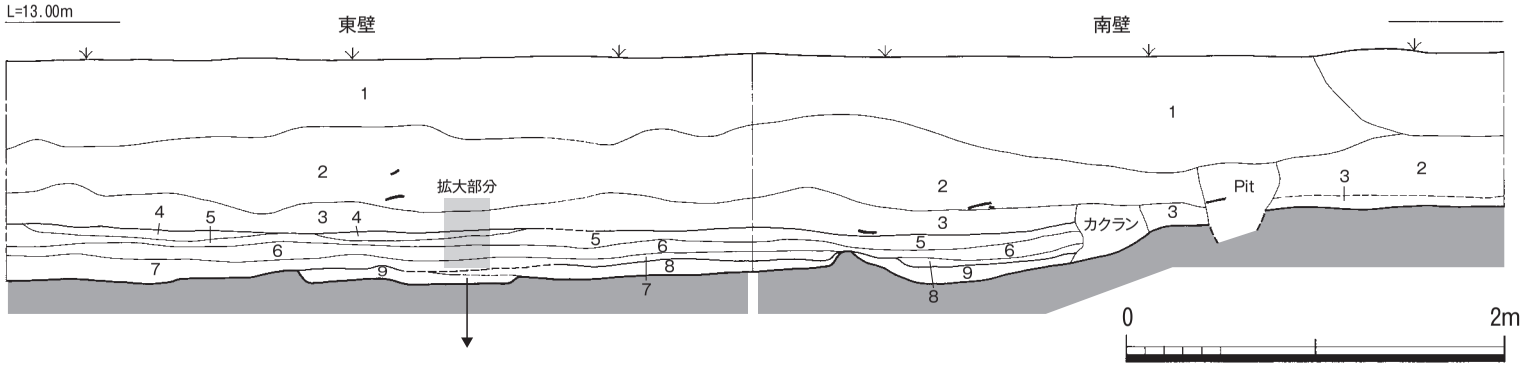


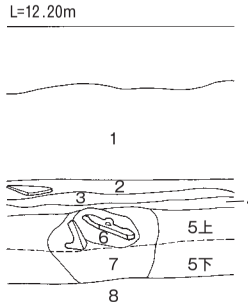
第 13 図　２号住居跡・１号周溝状遺構平・断面図（S=1/40）



壁面土層

1.黒茶褐色+真砂盛土〈造成土〉
2.淡黒色土(ややしまりあり、土器中量含む)※場所により土器が集中する。
3.暗灰黒色土(ややしまりあり、砂質混じる。黄橙・明褐色土粒多く含む。土器片多量)〈SC01埋土〉
4.黄白色砂(黒色粘質土混じり)〈SC01貼床上位〉
5.黒茶褐色土(しまる、φ2cmの黄橙色土ブロック粒多く混じる)〈SC01貼床下位〉
6.黒茶褐色土(5層に似るが、φ5cmとブロック粒大きい)〈SC02埋土〉
7.黒色土+黄褐色粘質土(硬化する、淡茶色土粒多く混じる、土器片少量)〈SC02貼床上位〉
8.黒色土(ややしまりあり、地山ブロック混じる))〈SC02内SK〉
9.黒色土(8層に似るが、ブロック多量に混じる)〈SV01埋土〉





仿製鏡周辺土層詳細図

仿製鏡出土層位

1.SC01　埋土
2.SC01貼床層(部分的)
3.SC01貼床層(黒色土ブロック小まじり)
4.SC01貼床層(鉄分沈着)
5.SC02　埋土
6.黒色土の広がり1(黒味が強くやわらかい)5層と粒の入り方は同じで黒色化する。金属部の溶出による変色か
7.黒色土の広がり2　5層と粒の入り方は同じで黒色化する。金属部の溶出による変色か
8.SC02　貼床層

0　50cm

第14図　調査区土層実測図(S=1/40)及び小型仿製鏡出土層位(S=1/10)

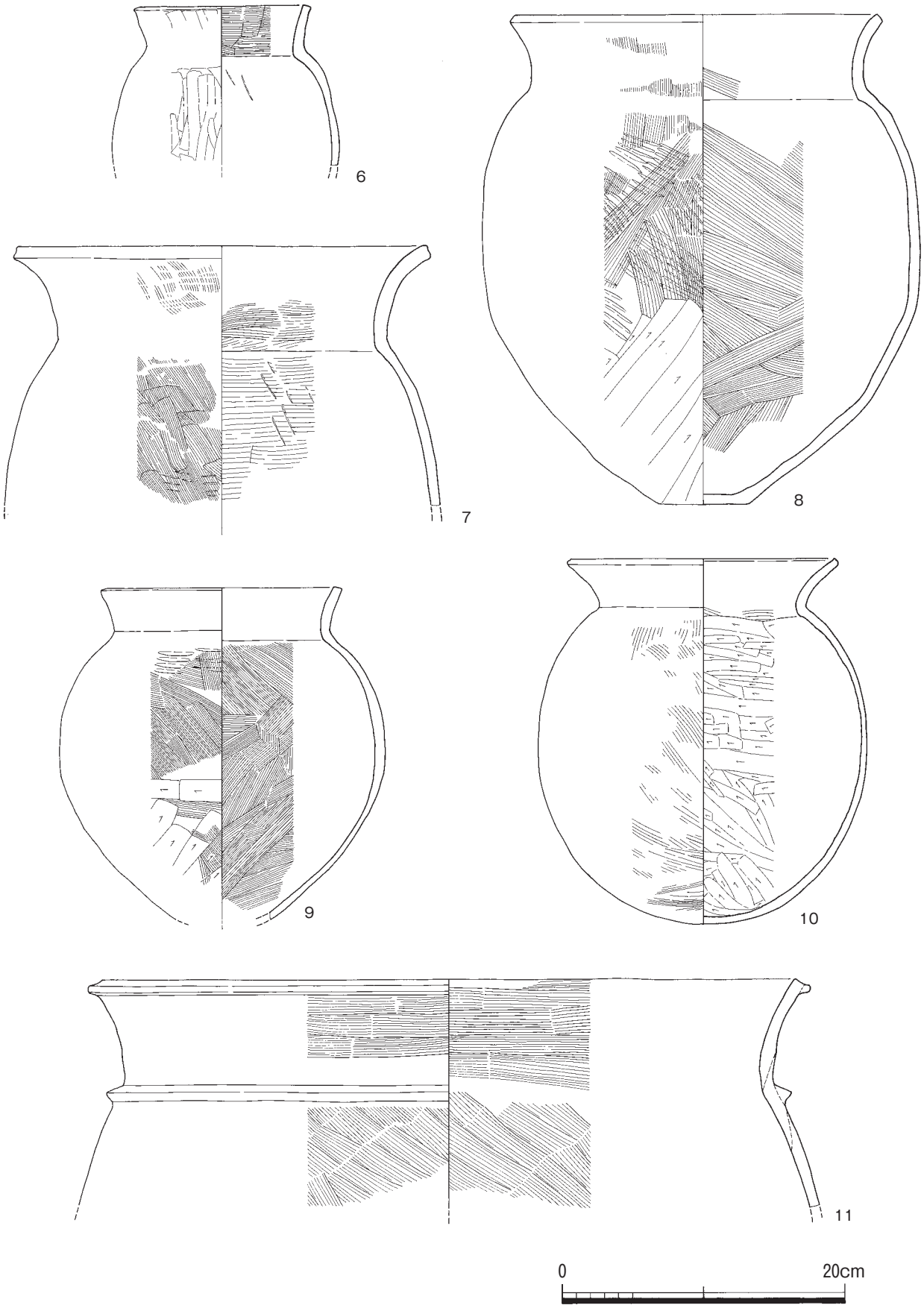
第 15 図　1 号住居跡出土土器実測図①（S=1/4）

し、最終的に土器群を見てみると、古墳時代前期のものが含まれており、それは検出段階の上位での出土と確認できた（第 16 図 10 など）。下層出土の「土器集積」は終末期を主体とする土器群で時期が異なる。住居の最終埋没は古墳時代前期としても良いが、住居廃絶時、埋没過程での土器の投棄は終末期に行われており、段階を分けた方が良いかと思われる。

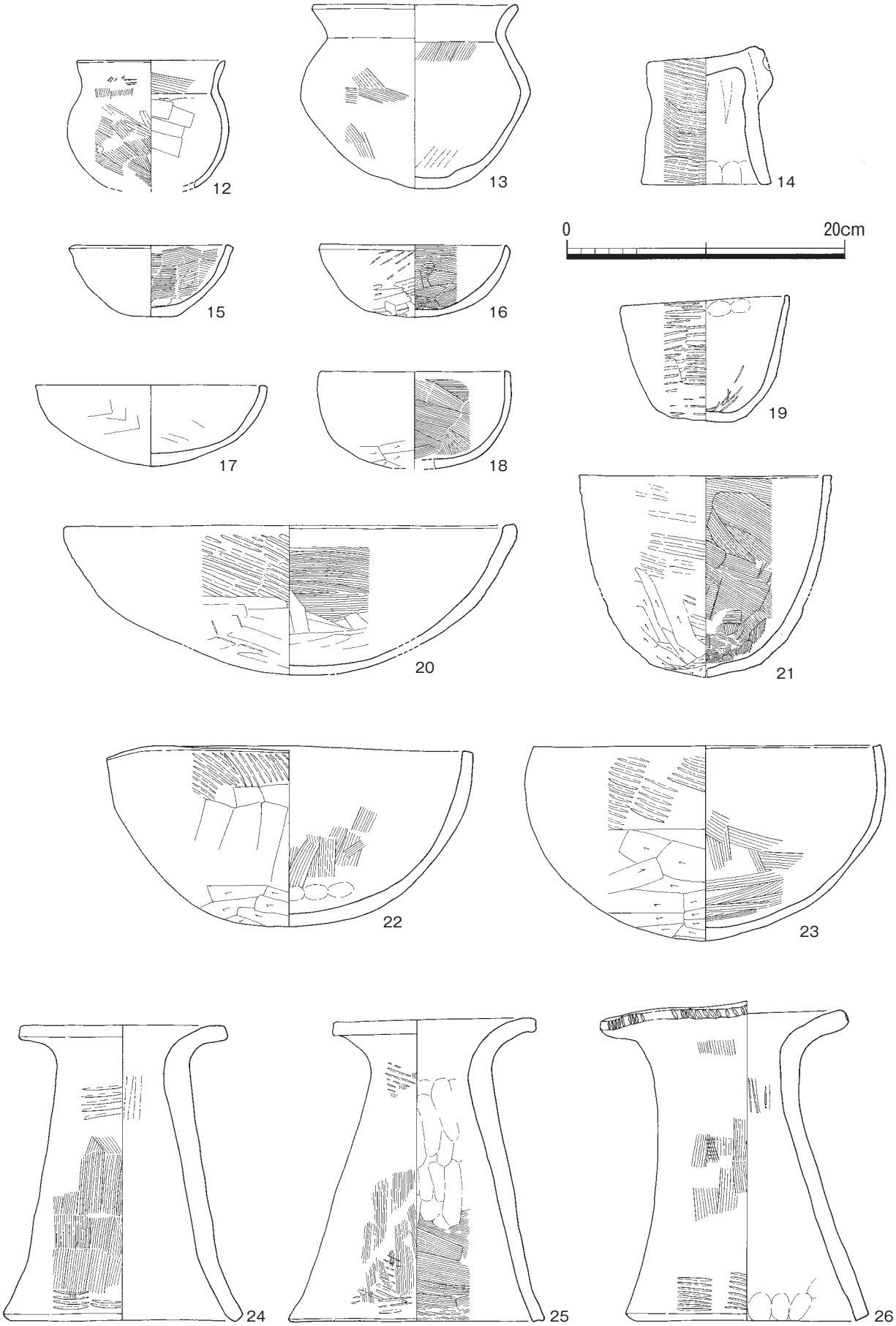
出土遺物

土器（第 15・16・17・18 図　図版 10・11）

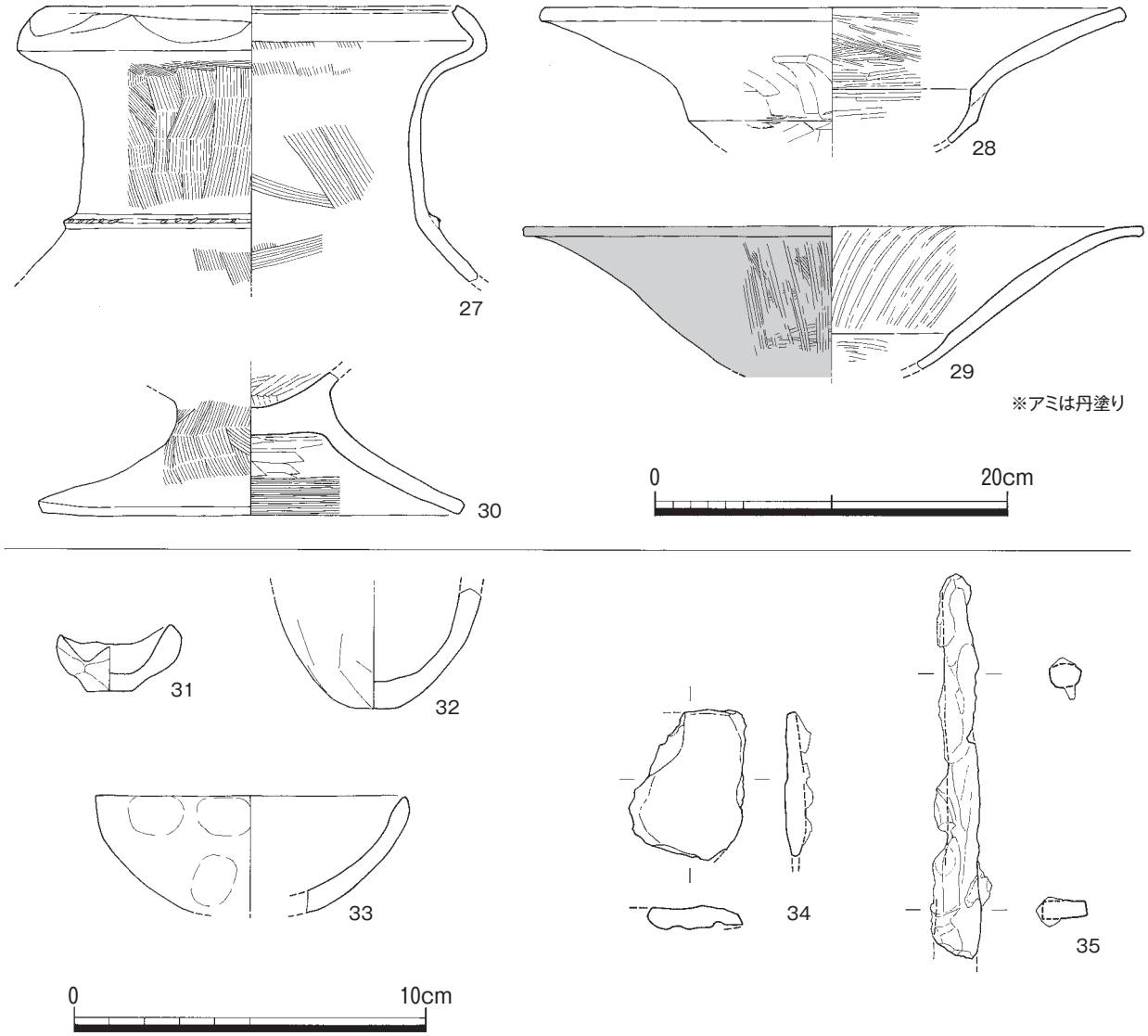
1 ～11 は甕である。在地の長胴甕は小形甕（1 ～ 3）と中形甕（4 ・ 5）に分かれる。重心も肩部にあるものから胴中位にあるものまでみられる。10 のような布留式甕も出土しているが、これは検出段階の出土である。11



第 16 図　1 号住居跡出土土器実測図②（S=1/4）



第 17 図　1 号住居跡出土土器実測図③（S=1/4）



第 18 図　１号住居跡出土土器実測図④（S=1/4）及び土製品・鉄器実測図（S=1/2）

は大形甕である。

12・13 は小形の丸底鉢である。14 は沓形支脚。15～23 は鉢である。24～26 は器台、27 は複合口縁壺で口縁外側にヘラガキの文様がみられる。30 は台付鉢の脚部分、28・29 は有稜高坏の坏部分である。31～33 はミニチュア土器である。

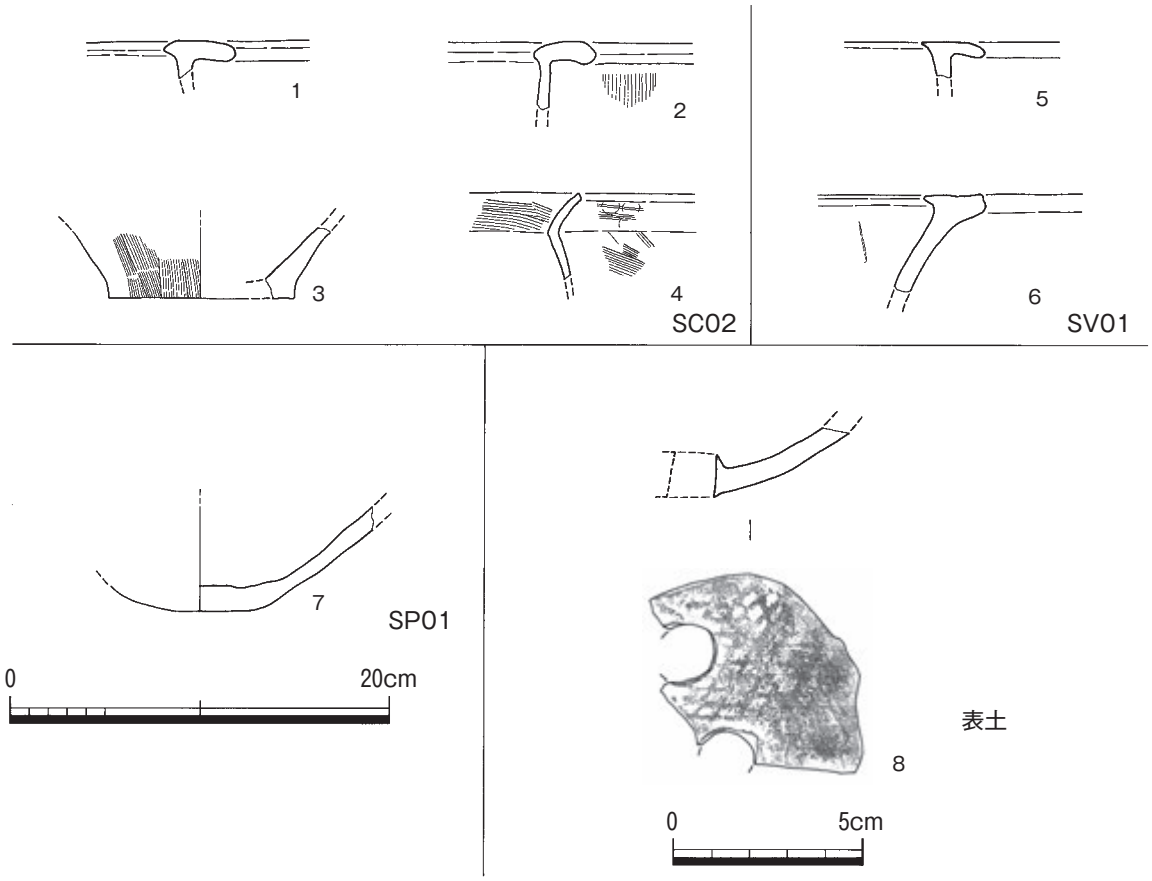
鉄器（第 18 図　図版 11）

34 は板状の鉄製品である。北半の覆土から出土した。長さ 4.25㎝、幅 3.3㎝、厚さ 0.8㎝、重さ 12.2ｇである。植物質の圧痕が不定方向に確認できる。35 はノミ状工具である。土器集積部から出土した。上半は断面隅丸方形状、厚さ８㎜程度で分厚い。下半は欠損しているが、残存部では扁平な断面長方形、厚さ５㎜に変化している。

２号住居跡（第 13 図　図版５）

１号住居の下層で確認した。１号住居と同じ主軸を持つ長方形住居と考えられ、２号住居が一回り小さい。

ベッド状遺構、主柱穴１基、炉を確認した。ベッド状遺構は南西側で検出した。短辺の一部に造り出されており、規模は 2.6m、幅 145mである。主柱穴は南西側のみの確認で、長軸 40㎝×短軸 30㎝程度の不整円形で、深さは 30㎝である。中央炉はおよそ東西に主軸を持ち、長軸 80㎝、短軸 40㎝、深さ 10㎝である。埋土下層はブロック土を多く含み、上層では黒褐色土に焼土を含んでいる。



第 19 図　２号住居跡・１号周溝状遺構ほか出土土器実測図（S=1/4、８のみ S=1/2）

また、壁面にかかっている状態で、埋土上層から小型仿製鏡が出土した。

小型仿製鏡の出土状況（第 13・14 図　図版７～９）

まず、小型仿製鏡の発見から出土状態の把握、取り上げについて、時系列にそって報告する。

７月９日（火）夕方、調査区東壁の清掃時に検出された。調査担当者（坂井）より一報を受けて、山崎が現場で確認したところ、小型仿製鏡は鏡背面（紐）を上向きにして、やや南側に傾いている姿勢であった。鏡縁は壁の清掃時に欠いている。土層精査前は鏡の周辺土が黒色土となっており、周囲と異なる土質で注意された。土器集積の最終検出を並行して進めており、その土器群との関係性にも注意が必要であった。

ひとまず、状況を確認し、B72 溶液を破断面に塗布し、強化した。７月 10 日（水）はその強化処置の経過観察と取り上げ方法の検討を行った。７月 11 日（木）より、出土状況の観察・記録を進めた。最終的に取り上げが完了したのは７月 14 日（日）である。

小型仿製鏡は幸いにも、調査区壁内から出土したこともあり、その層位の検討が可能であった。

鏡周辺土層の詳細図 P19（第 14 図下）の土層１が１号住居跡の埋土にあたる。その下層（２～４層）が１号住居跡の貼床相当層となる。貼床相当層は３層に細分される。２層が部分的に入る黄灰砂交じりの層で、３層が１号住居跡の貼床主体層で黒褐色土に地山ブロックが混じる層、４層が鉄分の沈着する層である。仿製鏡はその貼床層の下に位置する。

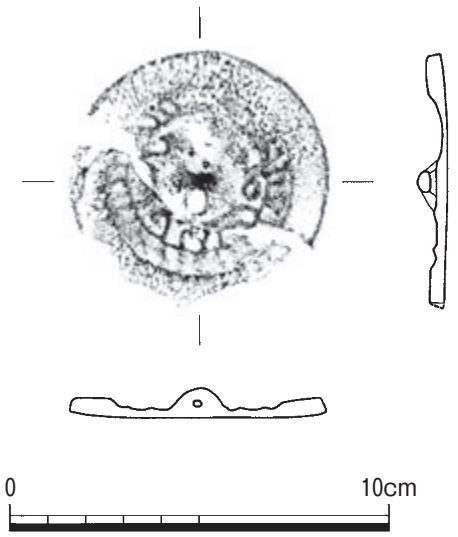
鏡周囲は２重に黒色土に覆われている。鏡周縁の黒色層１（６層）は黒味が強く周辺よりも少しやわらかい層となっている。この黒色層１は北側にある須玖式土器甕口縁部には広がっていない。その外側の広い黒色層２は口縁部片も内包して広がり、２号住居の貼床面まで到達している。なお、この２号住居の貼床面では床面形状に沿って、直線的なラインで終わっている。

この青銅器周囲の黒色土（化）は埋納青銅器で良くみられる現象である。金属成分の溶出に伴い、周囲の土と

化学反応し黒色化することがある。小郡市寺福童遺跡では、調査途中に土中のMn（？）が沈着し、青銅器の縁に付着する土が空気に触れ黒色化した現象を目の当たりにした。そのほか、島根県加茂岩倉銅鐸でも周囲に黒色土が広がり、徳島県矢野銅鐸でも黒色土が確認できる。一方では、この黒色土を青銅器の容器と判断することもあり、今後、この黒色土については化学成分などを分析する必要があるだろう。

これらを勘案して、小板井屋敷遺跡７出土の仿製鏡の出土状況について改めてまとめておきたい。

２号住居跡の上層からの出土で、筑後地域や有明海沿岸地域では集落域出土の小型仿製鏡も多く、その傾向をよく示している。隣から出土した須玖式土器甕口縁部は貼床層に混じっているもので、鏡との直接的な共伴関係を示すものではない。



第20図　２号住居跡出土小型仿製鏡実測図（S=1/2）

２号住居の埋土は大きめのブロック土が多く入る個所もあり、部分的な埋戻しを伴うと考えられる。竪穴式住居の廃棄時における最終段階で、小型仿製鏡が埋置された可能性が考えられる。鏡周囲のやわらかい土は容器の可能性も考えられなくもないが、その場合は有機質の袋状のものとなろうか。X線CT調査や鏡周囲の土の除去時には有機質は小片も確認できなかった。逆に須玖式土器口縁破片がかなり近接していることから、この黒色土を容器の痕跡とした場合、土器が部分的に容器に入っているかたちとなり、容器ではないと考えたい。仿製鏡を埋置する際にその大きさの若干の窪みを作り、土をかぶせ、その後、全体的に整地をしたのだろうか…。周囲の黒色土２ P19（第14図下）の広がりも、近接した土器片の状況からも容器ではなく、小型仿製鏡の金属成分が溶出し、土中の成分と何らかの形で反応したものの影響と考えたい。

埋置においては若干の傾きを持っているがほぼ水平におかれ、鏡背面を上向きにしている。無造作に投棄した状況ではないが、土中に混じった土器片に近いこともあり、埋置にあたって格別の注意が払われているわけでもなさそうである。

小型仿製鏡の時期は２号住居の埋没過程最終段階で、１号住居の貼床形成以前という時間幅が考えられる。１号住居と２号住居の時間的推移がどの程度見込まれるかが難しいところであるが、２号住居の部分的な埋戻しを考えると１号住居の貼床形成時に近い時期があてられるか。２号住居の埋戻しから１号住居の建設は一連のものである可能性がある。それは同一主軸をとっていることからも考えられ、２号住居跡を拡張して建て替えられた可能性があるだろう。これはせっかく周囲の調査が行われているので、住居の変遷のなかで考察してみたい。

出土遺物

土器（第19図）

１・２は須玖式甕口縁部片である。３は甕底部。これらは混入品であろう。４はくの字を呈する甕口縁部である。西新式の古段階前後か。

青銅器（第20図　図版12）

小型仿製鏡は、発見時に下半の縁部分を欠いている。また、手鍬の衝撃で下半で割れている。平縁で櫛歯文帯を持ち、円圏で区切られる。文様帯には蕨手や半円状のモチーフが描かれる。鏡背面には赤色顔料の塗布が少しばかりみられるので、全体に赤色顔料が塗布されていた。湯周りはあまり良くなく、湯口付近ではヒケのため、厚さがなく、文様帯もほとんど見えない状態である。紐穴はやや扁平な断面形で、0.15㎝程である。紐穴の天側に幅3.5㎜繊維状の圧痕が錆に残されている（図版12）。紐穴の径と比べると、紐の可能性は低い。

この小型仿製鏡の鏡式は重圏文系である。田尻分類の第Ⅱ類にあたり、（九州大学　田尻義了氏ご教示）広端－斜線文－圏線－文様帯となっている。紐座は省略される。文様帯では半円状の二重同心円が１か所のみ確認され、その他は蕨手文が連続して配置される。

２．周溝状遺構

１号周溝状遺構（第 13 図　図版５）

調査区南東隅、２号住居下層から検出された。小板井屋敷遺跡５地点の９号溝や 12 号溝と同一遺構となる。全体の規模は９ｍ程度の径となろうか。溝は逆台形状で幅 60㎝～１ｍ、残存深さ５㎝程度。

出土遺物

土器（第 19 図）

５は須玖式甕口縁部片である。６は須玖式壺口縁部である。

３．小結

小板井屋敷遺跡７調査区は面積が矮小で、調査区内すべてが住居遺構のなかにあり、難しい調査となった。１号住居跡の埋没過程で簡易な掘り込みを行い投棄された土器群や２号住居の埋土上層、１号住居の貼床層下から出土した小型仿製鏡など、多くの出土遺物があった。投棄された土器群は弥生時代後期後葉から終末期に及ぶ。この土器群の投棄行為は、周辺の調査区の成果と併せて、集落変遷・動向から明らかにする必要があろう。小型仿製鏡の埋置された時期は、住居埋土出土土器を参考にすると西新式古段階で、１号住居の埋没過程で投棄された土器群が西新式新段階までの資料を含むので、弥生時代終末の時期があてられる。住居の形態からも首肯できる。

なお、表土中から多孔式の甑が出土している。韓半島の瓦質土器で外面には斜格子の叩き目がのこっている。

第６章　調査の成果

１．溝について

小板井屋敷遺跡６次調査で検出された１～４号溝は一連の溝である。その規模から５次調査Ａ区SD02、Ｄ区SD01、８次調査SD03が方向、規模から同一の溝であると考えられる。調査によって溝の規模が部分的ながら明らかとなった。この溝は南側で東西方向に長さ51.2mを測る。南東端では築地川に沿うように北側へと屈曲した後、北北東方向に35.2m以上延びる（８次調査 SD03）。西側では南西端で北北東に屈曲（５次調査 Ｄ区SD01）した後、16.4m付近からさらに屈曲し、北に向かって（５次調査 Ａ区SD02）延びる（付図参照）。

６次調査における土層観察からは２号溝（旧）→１号溝・２号溝（新）の最低２回は掘り直しが行われたことが明らかとなった（第８図参照）。掘り直しは各溝埋没後のことである。２号溝（旧）の埋没後、遺物包含層が堆積しており、２号溝（新）の掘り直しまで時間差があることがわかる。溝からの出土遺物には、古いものは弥生時代中期の土器、須恵器、土師器等がみられる。包含層にも同時期の遺物が多くみられ、これらは混入品と考えられる。溝に伴う出土遺物中古いものは16世紀末から17世紀初頭頃、新しいものは18世紀前半頃に比定される。この期間に溝が利用されていたものと考えられるが、この時期に該当する遺物は第８図で示したように極めて少ない。５・８次調査でも出土遺物量は少なく、この溝が継続的ではなく、断続的な利用であったものと考えられる。17世紀中頃に比定される遺物は、５次調査Ｄ区SD01でわずかに出土している。

小板井「屋敷」の字名から当地域に屋敷地があったことが想定される。現在、この「屋敷」推定地は明らかとなっていないものの、５・６・８次調査で検出されたこの大規模な溝が屋敷地区画溝である可能性は考えられよう。今回の調査によって屈曲点が明らかとなったことで、この屋敷推定地が東西屈曲点の中央付近北側に位置する現在の寺院付近と想定される。

２．小板井村および屋敷地の成立について

ここで文献上からみえる小板井村の成立時期について考察してみる。天正15（1587）年、豊臣秀吉の九州仕置、御原郡・御井郡の筑後川以北が豊臣氏の蔵入地となった後、文禄４（1595）年には小早川秀俊（後に秀秋）に加増された。同年、秀俊は家臣に両郡内の村を知行分として給与しており、尼子家臣草刈衡継の子、景継の弟である草刈重継（草刈太郎左衛門尉・次郎・太郎左衛門・対馬守）に小板井村二六九石三斗八升が宛がわれている。このことから、小板井村は16世紀末以前に成立したものと考えられる。

慶長５（1600）年、小早川秀秋は備前国岡山に加増・転封したため、同年、田中吉政が三河国岡崎から筑後一円の国主として入封した。元和６（1620）年、二代目田中忠政の時断絶。元和７（1621）年には有馬豊氏が丹波国福知山から久留米二一万石大名として入国している。近世における小郡市域は久留米藩の一部であるが、久留米領では、城下を除き、領内を八郡・二十五組に分け、各郡奉行のもと組ごとに大庄屋を置き、１から数か村ごとに庄屋（小庄屋）を配置したようである。小板井屋敷遺跡の位置する地区は御原郡「用丸組」と「井上組」に属していることがわかっているが、詳細は不明である。

寛文８（1668）年には、二代藩主有馬忠頼の養子、有馬豊範（但馬出石藩主小出重吉の三男）が御原郡内に松崎藩領一万石・一九か村を分与され、松崎町が創設、松崎館、松崎宿が整備された。その後、貞享元（1684）年には、有馬豊範が改易し、この一九か村は幕府領となるが、元禄10（1697）年には久留米藩に返還され、明治元（1868）年まで有馬氏に属することとなる。この間、延享４（1747）年に作成された「御原郡稲吉村本地田畑畝高水帳」に氏名は不明であるが、小板井村の高持百姓一名が記載・押印していることが確認できる。この時期には小板井村に庄屋がおり、庄屋屋敷が存在したものと考えられる。

明治初期に作成されたと考えられる「大原古戦場図」には「小板井」名があり、明治15（1882）年字小名調の小板井村には、すでに字「屋敷」名がみとめられる。しかしながら、この時点で当地に屋敷が存在していたかは不明である。

小板井屋敷遺跡６次調査で得られた成果からは、区画溝の利用時期として16世紀末から18世紀前半が推定された。時期を決定するには資料が少なく決め手に欠けるが、この利用時期をそのまま当てはめると、文禄４(1595)年の草刈太郎左衛門尉に小板井村が宛がわれた時期に屋敷地が成立した可能性が考えられよう。時期は不明であるが、この後、庄屋屋敷として利用されてきたのであろうか。区画溝内部の調査は実施されていないため、この屋敷地がどのような性格のものであったか、文献上からもその内容を明らかにすることはできなかった。今後の調査に期待したい。

調査期間中に近隣住民からこの「屋敷」について話を伺うことができた。今回の調査によって屋敷地区画内に推定された現在の本照寺は、小郡市二森にあった寺からの分寺であり、本来は二森の大庄屋から分かれた庄屋の屋敷地であったとの話が残っているそうである。上記の考察結果とも齟齬がなく、屋敷推定地と考えて、今後の調査には留意する必要があろう。

そのほか調査区隣接地に流れる築地川沿いの調査区南東側にある現在は竹やぶになっている位置に「塚」があったが、盗掘を受けており何も残っていなかったとのことである。現在も小高い高まりとなっており、小規模な円墳である可能性がある。

第１表　《小板井屋敷遺跡６》出土遺物観察表

出土遺構		挿図番号	図版番号	器種	法量cm（復元値）	色調	胎土	焼成	成形・調整	備考
２号住居跡	床面直上	6-1	4-1	須・坏	口：21.3 底：11.2 高：9.4	内・外：灰白	５㎜以下の砂粒を少し含む 黒色土粒を含む	良好	外：回転ヘラケズリ、回転ナデ、底部ヘラ切り 内：回転ナデ、仕上げナデ	
	貼床内	6-2	4-2	弥・甕	底：(7.9)	内：浅黄橙 外：灰褐～灰黄褐	１㎜以下の砂粒を少し含む	良好	外：タテハケ、ナデ 内：ナデ	内面は器壁剥離が著しく調整不明瞭
３号住居跡	覆土	6-3	4-3	弥・甕	口：(33.0)	内：橙 外：明赤褐	１㎜以下の砂粒を少し含む	良好	外：タテハケ後ヨコナデ 内：指オサエ後、ヨコナデ	
	覆土	6-4	4-4	弥・甕	口：(32.0)	内・外：橙	２㎜以下の砂粒を少し含む	良好	外：タテハケ後ナデ 内：指オサエ後ナデ	
４号住居跡	ピット	6-5	－	弥・高坏	底：(12.0)	内・外：浅黄橙	２㎜以下の砂粒をわずかに含む	良好	外：タテハケ後ヨコナデ 内：ヨコナデ	
溝	１号溝	10-1	4-13	陶器・丸皿	底：(8.0)	内・外：にぶい黄橙	精良	良好	外：回転ナデ、回転ヘラ切り 内：回転ナデ	外面に薄く灰釉がかかる
	２号溝	10-2	4-13	白磁・鉢	口：(17.4)	内・外：灰白	精良	良好	外：回転ナデ 内：回転ナデ	焼成時の気泡、破裂痕がみられる
	２号溝	10-3	－	磁器・碗	底：(7.6)	内・外：灰白	黒色土粒を少し含む	良好	外：タテハケ後ヘラケズリ、削り出し高台 内：回転ナデ	砂目積み焼成 高台内は露胎
	１・２号溝	10-4	4-13	須・鉢	口：－	内・外：灰白	１㎜以下の砂粒をわずかに含む	良好	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、ナデ	
	４号溝	10-5	4-13	磁器・鉢	口：－	内・外：灰白	精良	良好	外：ヘラケズリ 内：回転ナデ	
包含層	１号住居跡	11-1	4-5	弥・甕	口：(32.4)	内：橙 外：にぶい褐	２㎜以下の砂粒を少し含む	良好	外：タテハケ 内：ヨコナデ	
	１号住居跡	11-2	4-6	弥・甕	口：(32.5)	内・外：にぶい褐	１㎜以下の砂粒をわかに含む	良好	外：タテハケ、ヨコナデ 内：ヨコナデ、ナデ	
	１号住居跡	11-3	4-7	弥・甕	口：(33.8)	内・外：にぶい黄橙	３㎜以下の砂粒を少し含む	良好	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	
	１号住居跡	11-4	4-8	弥・甕	口：(33.0)	内：にぶい褐 外：にぶい橙	１㎜以下の砂粒をやや多く含む	良好	外：タテハケ 内：ナデ	
	１号住居跡	11-5	4-9	弥・甕	底：(8.8)	内：にぶい橙 外：灰黄褐	２㎜以下の砂粒をやや多く含む	良好	外：タテハケ 内：ナデ、指オサエ	
	１号住居跡	11-6	－	弥・高坏	底：18.0～18.4	内・外：明赤褐	１㎜以下の砂粒を少し含む	良好	外：ミガキ 内：指ナデ	外面は磨耗し、一部調整単位不明瞭
	１号住居跡	11-7	4-10	弥・器台	口：(9.3)	内・外：にぶい橙	１㎜程度の砂粒を少し含む	良好	外：タテハケ後一部ナデ 内：ナデ	
	１号住居跡	11-8	4-11	弥・器台	底：(10.0)	内：灰黄褐 外：にぶい橙	精良	良好	外：タテハケ、指オサエ後ナデ 内：指オサエ、ハケメ後ナデ	
	２号住居跡	11-9	4-12	弥・甕	口：(35.0)	内：にぶい橙 外：にぶい黄橙	1㎜以下の砂粒を少し含む	良好	外：ヨコナデ、タテハケ 内：指オサエ、ナデ	
	２号土坑	11-10	－	弥・甕	口：(35.0)	内・外：にぶい褐	１㎜以下の砂粒をわずかに含む	良好	外：タテハケ後ヨコナデ 内：ヨコナデ	
	２号土坑	11-11	－	弥・甕	口：(30.8)	内・外：にぶい黄橙	１㎜以下の砂粒を少し含む	良好	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	

第２表　《小板井屋敷遺跡７》出土遺物観察表

出土遺構		挿図番号	図版番号	器種	法量cm（復元値）	色調	胎土	焼成	成形・調整	備考
SC01	土器集積	15-1	－	甕	口：(15.2)	外：褐灰 内：灰褐	１㎜以下の微砂粒を主に含み、２～３㎜の砂粒も僅かに含む	良好	外：タタキ後ハケ、ハケ後工具ナデ 内：ハケ後ヨコナデ、ハケ後工具ナデ、ナデ	外面にススの付着
		15-2	10-6	甕	口：(20.2)	外：にぶい褐～褐灰 内：橙	１～３㎜の砂粒を多く含む	良好	外：ヨコナデ、タタキ 内：ヨコナデ、ハケ、ハケ後板状工具ナデ	外面にススの付着、赤変
		15-3	－	甕	口：(21.7)	外：にぶい褐～灰黄褐 内：橙	１～２㎜の砂粒を含む	良好	外：タタキ後ヨコナデ、タタキ後板状工具ナデ 内：ヨコナデ、板状工具ナデ	外面にススの付着
		15-4	10-1	甕	口：24.1 器高：37.2 底：5.2	外：灰黄褐 内：にぶい黄橙～褐灰	主に１㎜以下の微砂粒を含むが、２～４㎜の砂粒も僅かに含む	良好	外：タタキ後板状工具ナデ、板状工具ナデ 内：ハケ後ヨコナデ、ハケ	外面に著しススの付着、内面底部に炭化物の付着
		15-5	－	甕	口：28.6 器高：23.0	外：黒褐 内：にぶい黄橙	４㎜以下の砂粒を少し含む	良	外：タタキ、ハケメ 内：ハケメ	外面は一面コゲとスス付着
		16-6	－	甕	口：(12.5)	外：にぶい橙 内：にぶい橙～褐灰	１㎜以下の微砂粒を主に含み、２～４㎜の砂粒を僅かに含む	良好	外：ヨコナデ、工具ナデ後ナデ、工具ナデ 内：ヨコ方向ハケ、ナデ	内外面に黒斑、外面にススの付着
		16-7	－	甕	口：(29.4)	外：橙色 内：橙～明赤褐	１～３㎜の砂粒を含む	良好	外：ハケ後ヨコナデ、タタキ後ハケ 内：ヨコナデ、ハケ後ヨコナデ、ハケ	
		16-8	10-5	甕	口：25.6 器高：34.6	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	１㎜以下の砂粒を少し含む	良	外：タタキ、ハケメ、ヘラ削り 内：ナデ、ハケメ	外面に黒斑
		16-9	10-2	甕	口：17 器高：23.4	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	３㎜以下の砂粒をやや多く含む	良	外：タタキ、ハケメ、ケズリ 内：ハケメ	外面に黒斑
		16-10	10-3	甕	口：(19.1) 胴部径（23.2） 器高：25.8	外：にぶい褐～明赤褐 内：にぶい褐色	１㎜以下の微砂粒～３㎜の砂粒を含む	良好	外：ヨコナデ、ハケ後ナデ消し 内：ヨコナデ、ハケ、ヘラケズリ	内面底部に僅かに炭化物の付着、外面にススの付着検出時出土
		16-11	－	甕	口：21.9 器高：16.2	外：にぶい橙 内：灰黄	３㎜以下の砂粒を多く含む	良	外：ハケメ 内：ハケメ	－
		17-12	10-11	鉢	口：10.6 器高：9.2	外：褐灰 内：にぶい褐	１㎜以下の砂粒を少し含む	良	外：ハケメ、ミガキ 内：ハケメ、工具ナデ	外面胴部ススの付着 外面口縁部の斜方向の工具ナデは、かなり粗い
		17-13	10-10	鉢	口：14.8 底：2.5 器高：13.2	外：褐灰 内：にぶい褐	１㎜以下の砂粒をやや多く含む	良	外：ナデ、ハケメ 内：ナデ、ハケメ	外面剥離のためハケメ一部残存。外面ススの付着 内面にもスス
		17-14	11-13	沓形器台	口：7.7 裾：9.4 器高：9.9	外：灰黄褐 内：褐灰	２㎜以下の砂粒をやや多く含む	良好	外：タタキ 内：ナデ、指オサエ	
		17-15	－	鉢	口：11.8 底：4.6 器高：5.1	外：浅黄橙 内：浅黄橙	２㎜以下の砂粒を少し含む	良	外：ナデ 内：ハケメ、指オサエ	
		17-16	11-14	鉢	口：13.7 器高：5.2	外：橙色～灰黄褐 内：明褐	１㎜以下の微砂粒を多く含む	良好	外：タタキ後ナデ、工具ナデ 内：ハケ	－
		17-17	11-18	鉢	口：16.6 器高：5.8	外：褐灰 内：橙	１㎜以下の砂粒を多く含む	良好	外：工具ナデ 内：工具ナデ	外面ススの付着、黒斑３ヶ所
		17-18	11-15	鉢	口：13.4 器高：(7.0)	外：橙 内：橙	１㎜以下の砂粒をやや多く含む	良	外：タタキ後ナデ、ヘラ削り 内：ハケメ	外面に黒斑
		17-19	10-4	鉢	口：12.2 器高：8.7	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	１㎜以下の微砂粒～３㎜の砂粒を含む	良好	外：タタキの後、部分的にナデ、ナデ 内：ナデ、工具痕、指オサエ痕	内外面に黒斑
		17-20	11-19	鉢	口：(32.6) 器高：10.9	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙～灰黄褐	１㎜以下の微砂粒～３㎜の砂粒を含む	良好	外：ヨコナデ、タタキ、工具ナデ 内：ヨコナデ、ハケ後工具ナデ	内面、部分的に炭化物の付着、外面にうすい黒斑
		17-21	－	鉢	口：(18.2) 器高：14.6	外：にぶい黄橙～橙 内：橙	１～３㎜の砂粒を含む	良好	外：タタキ、タタキ後ヘラケズリ、ヘラケズリ 内：ハケ	外面に黒斑
		17-22	11-16	鉢	口：26.4 底：なし 器高：13.0	外：にぶい黄橙 内：橙	２㎜以下の砂粒をやや多く含む	良	外：タタキ、工具ナデ、ヘラ削り 内：ナデ、ハケ、指オサエ	外面に黒斑１ヶ所 口縁部外面は、タタキを１周
		17-23	11-17	鉢	口：25.2 器高：14.0	外：橙 内：橙	１㎜以下の砂粒を多く含む	良	外：タタキ、ヘラ削り 内：ナデ、ハケメ	外面に黒斑
		17-24	－	器台	口：15.0 裾：17.2 器高：21.3	外：にぶい黄橙 内：灰黄褐	２㎜以下の砂粒をやや多く含む	良	外：タタキ、ハケメ 内：ナデ	外面にススか炭化物付着
		17-25	－	器台	口：(14.6) 底：(18.4) 器高：21.7	外：にぶい黄橙～褐灰 内：灰黄褐	１㎜以下の微砂粒を多く含み、２～３㎜の砂粒を僅かに含む	良好	外：タタキ後、ハケ後、ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、指オサエ、ハケ	外面、部分的にススの付着
		17-26	10-12	器台	口：17.8 裾：17.4 器高：23.1	外：にぶい褐 内：にぶい褐	１㎜以下の砂粒やや多く含む	良	外：タタキ、ナデ、ハケメ 内：ナデ、指オサエ	外面ススの付着 特に端部は明瞭でなく、場所により厚さが変化

出土遺構		挿図番号	図版番号	器種	法量cm（復元値）	色調	胎土	焼成	成形・調整	備考
SC01	土器集積	18-27	10-9	複合口縁壺	口：23.4 頭部：19.2 器高：15.7	外：にぶい黄橙 内：にぶい黄橙	１㎜以下の砂粒をやや多く含む	良		外面口縁部の沈線は波打っている
		18-28	11-21	高坏	口：(33.2)	外：明赤褐～にぶい黄橙 内：明赤褐	１～３㎜の砂粒を多く含む	良好	外：工具ナデ 内：ミガキ	外面に黒斑
		18-29	11-20	高坏	口：(35.2)	外：明赤褐 内：明赤褐	１㎜以下の微砂粒～４㎜の砂粒を含む	良好	外：ヨコナデ、ハケ後ミガキ 内：ヨコナデ後暗文、ミガキ	内面に暗文、外面に黒斑、外面丹塗り
		18-30	－	台付鉢	裾：23.7 器高：8.1	外：黄橙 内：橙	１㎜以下の砂粒を少し含む	良	外：ハケメ 内：ミガキ（脚：工具ナデ、ハケメ）	裾部に黒斑
		18-31	－	ミニチュア土器	口：3.15 底：1.3 器高：1.9	外：浅黄 内：灰黄褐	１㎜以下の砂粒をやや多く含む	良	外：指オサエ 内：指オサエ	口縁部は粘土を押し広げた関係で花びら状に波打っている
		18-32	－	ミニチュア土器	底：1.4 器高：3.3	外：浅黄 内：にぶい黄橙	１㎜以下の砂粒をやや多く含む	良	外：工具ナデ 内：ナデ	外面は工具調整
		18-33	－	ミニチュア土器（鉢）	口：8.8 器高：3.3	外：橙 内：にぶい黄橙	１㎜以下の砂粒をやや多く含む	良好	外：指オサエ、ナデ 内：ナデ	－
SC02	貼床内	19-1	－	甕	器高：1.9	外：浅黄橙 内：浅黄橙	３㎜以下の砂粒をやや多く含む	良	外：ナデ 内：ナデ	－
		19-2	－	甕	器高：3.5	外：浅黄橙 内：にぶい黄褐	２㎜以下の砂粒をやや多く含む	良	外：ハケメ 内：ナデ	－
		19-3	－	甕	底：9.8 器高：3.7	外：にぶい黄橙 内：灰白	２㎜以下の砂粒をやや多く含む	良	外：ハケメ 内：ナデ	－
		19-4	－	甕	器高：3.9	外：灰黄褐 内：にぶい黄橙	３㎜以下の砂粒を少し含む	良	外：ナデ、ハケ 内：ナデ、ハケ	外面にスス付着
SV01	－	19-5	－	甕	口：28.6 器高：1.8	外：浅黄橙 内：浅黄橙	１㎜以下の砂粒少し含む	良	外：ナデ 内：ナデ	－
	－	19-6	－	壺	－	外：にぶい橙～褐灰 内：にぶい橙	２㎜以下の砂粒含む	良好	外：ヨコナデ、ナデ 内：ヨコナデ、ナデ	－
SP1	－	19-7	－	壺	底：7.0 器高：5.5	外：浅黄橙 内：灰黄褐	２㎜以下の砂粒多く含む	良	外：ナデ 内：ナデ	底部は凸レンズ状
表土	－	19-8	11-22	瓦質土器甑	器高：1.8	内外：灰	微砂を少し含む	良好	外：タタキ 内：ナデ	底部穿孔は外→内へ

①小板井屋敷遺跡６調査区全景（南東から）

②小板井屋敷遺跡６調査区全景（西から）

図版２

①１号住居跡完掘状況（北から）

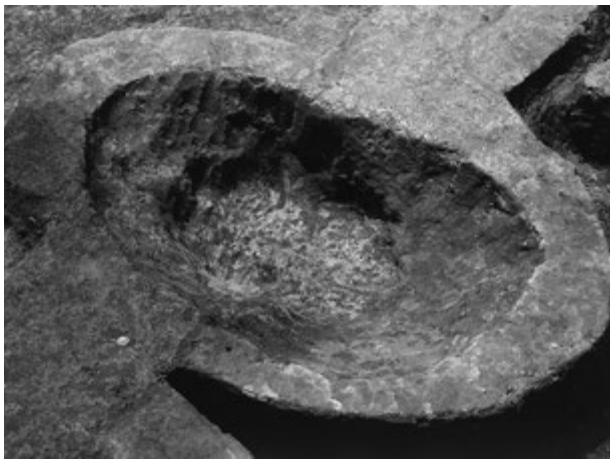
②２号住居跡完掘状況（北から）

③２号住居跡遺物出土状況（北から）

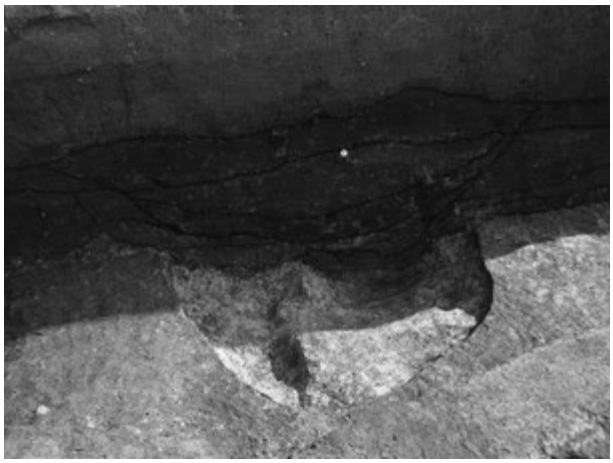
④３号住居跡完掘状況（南東から）

⑤４号住居跡完掘状況（北から）

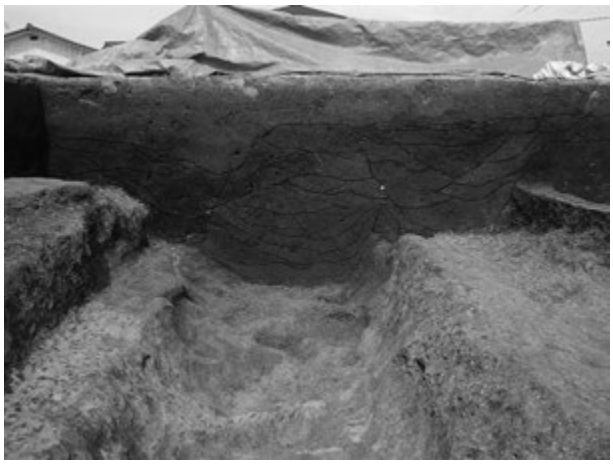
⑥５号住居跡完掘状況（北から）



①１号土坑完掘状況（北から）



②２号土坑完掘状況（北から）



③１・２号溝土層（東から）

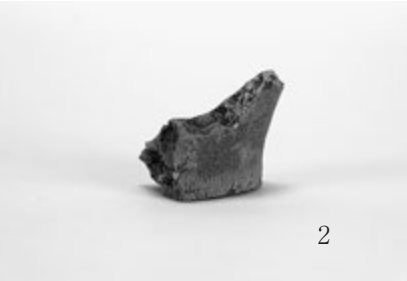
④１・２号溝土層（西から）

⑤３・４号溝土層（北から）

⑥土坑状遺構完掘状況（北から）

図版４

1


2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

出土遺物

①小板井屋敷遺跡７調査区全景〈SC01〉（北西から）

②小板井屋敷遺跡７調査区全景〈SC02・SV01〉（南西から）

図版６

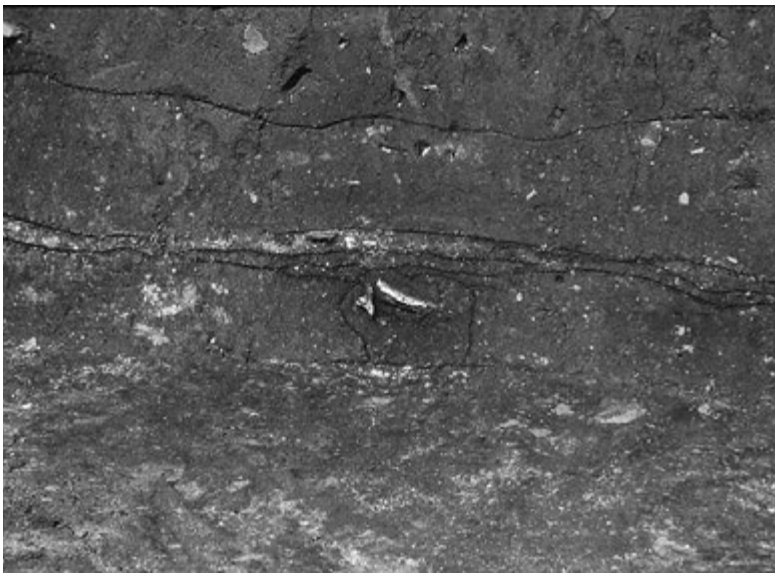
①１号住居跡土器集積上層
（南西から）

②１号住居跡土器集積上層
（南から）

③１号住居跡土器集積下層
（南から）

①小型仿製鏡出土状況（西から）

②小型仿製鏡出土状況（南から）



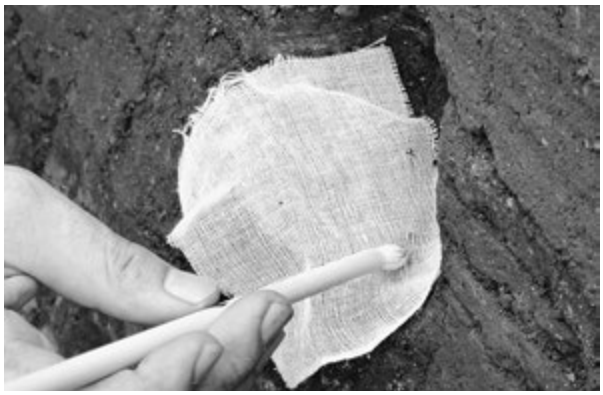
③小型仿製鏡土層精査（南西から）

図版８

①小型仿製鏡土層精査詳細
（南西から）

②小型仿製鏡背面検出

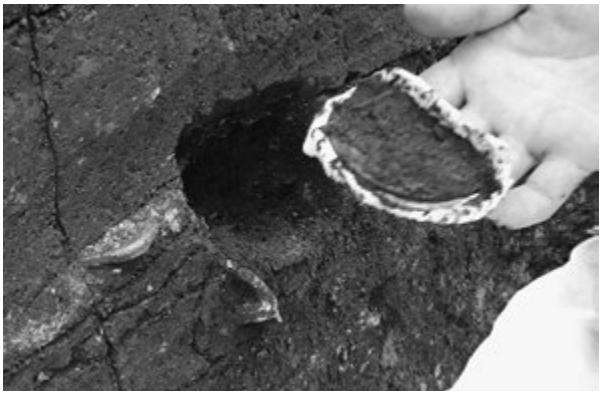
③小型仿製鏡背面検出状況



①小型仿製鏡表打ち補強

②小型仿製鏡 B72 塗布

③小型仿製鏡取り上げ



④小型仿製鏡取り上げ（鏡面）

⑤小型仿製鏡取り上げ後

⑥土壌切り取り準備

⑦発泡ウレタン注入状況

⑧掘削作業風景

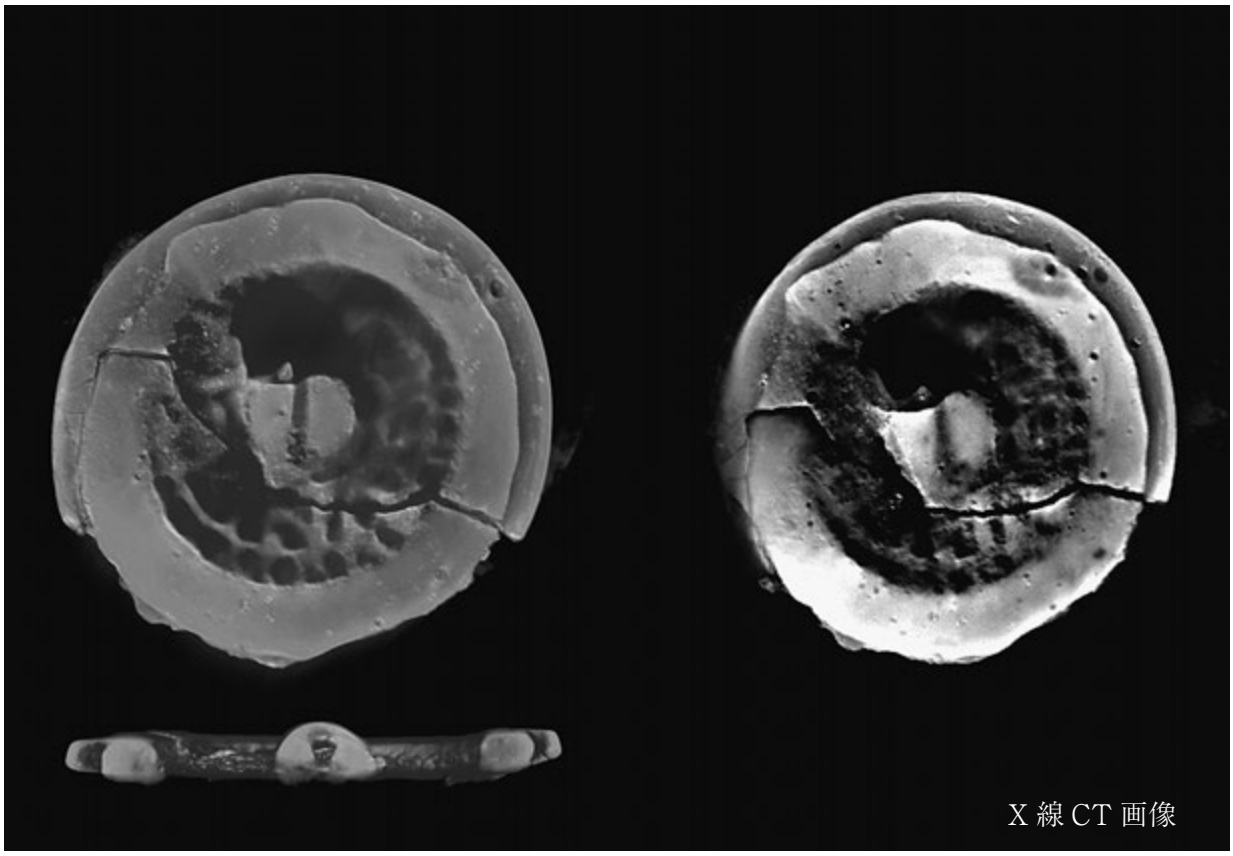
小型仿製鏡の取り上げ工程

図版 10

出土遺物①

出土遺物②

図版 12



出土小型仿製鏡

報　告　書　抄　録

ふりがな	こいたいやしきいせき６・７
書名	小板井屋敷遺跡６・７
副書名	
巻次	
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 290 集
編著者名	龍孝明／山崎頼人
編集機関	小郡市教育委員会
所在置	〒 838-0198　福岡県小郡市小郡 255-1　TEL 0942-72-2111
発行年月日	2015（平成 27）年 3 月 27 日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
小板井屋敷遺跡６（こいたいやしきいせき）	福岡県小郡市小板井字屋敷（ふくおかけんおごおりしこいたいやしき）	40216		33°23′31″	130°33′41″	2013.04.18～2013.05.17	70㎡	個人住宅
小板井屋敷遺跡７（こいたいやしきいせき）	福岡県小郡市小板井字屋敷（ふくおかけんおごおりしこいたいやしき）	40216		33°23′31″	130°33′40″	2013.06.14～2013.07.16	16㎡	個人住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小板井屋敷遺跡６	集落	弥生 古代 近世	住居跡、土坑、溝	弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器	
小板井屋敷遺跡７	集落	弥生 古代 近世	住居跡、土坑、溝	弥生土器、須恵器、土師器、小型仿製鏡	

要約

６次調査では弥生～古代の竪穴住居、近世の溝を検出した。近世溝は屋敷地の区画溝である可能性があり、過去の調査分を含めると東西方向に 51.2 m、南北方向 35 m以上の規模となる。

７次調査では弥生時代終末期の竪穴住居２軒が検出された。２号住居跡埋土上層から埋置された小型仿製鏡が出土した。

小板井屋敷遺跡６・７

小郡市文化財調査報告書第 290 集

2015 年 3 月 27 日

発行　小郡市教育委員会
小郡市小郡 255-1

出版　ハイウェーブデザイン
小郡市力武 255-44